

近代漢語辞書の基準

松井利彦

(一)

「明治期漢語辞書大系」(全六八巻)の刊行が平成九年三月に完了して、影印とはいえ、現物に近い姿の漢語辞書を書齋で、または研究室で見ることができるようになった。^{注1}この時期の漢語辞書については、早く山田忠雄氏の「漢和辞典の成立」^{注2}、およびその附表によって多数の書名を知ることができ、漢語辞書の概要を把握することが可能になっていった。続いて、昭和五十六年七月に山田氏の『近代国語辞書の歩み』(三省堂刊)が出版され、漢語辞書の内容と特徴、辞書内における位置づけなど、多くのことを学ぶことができるようになった。さらに、平成六年六月から平成七年一月にかけて出版された『国立国会図書館蔵書目録明治期』によって明治期における辞書出版の盛況について情報を得ることが容易になり、そして実物を手に取るきっかけが与えられていた。もともと、現在は国会図書館のこの種の辞書はマイクロフィッシュによってしか見ることができず、歯がゆいところがあるが、一方では、製本の崩れた現物を手に取るよりは気兼ねなく調査ができ、また自由にコピーをすることが許されるという利点が出て来て

便利になったところもある。しかし、国会図書館に向かなければ閲覧できないという決定的な不便さは解消しなかった。そこへ、「明治期漢語辞書大系」(以下では「大系」とのみ呼ぶことがある)が加わり、近代漢語辞書の研究がしやすくなった。

ところが、「大系」に収載されている辞書のなかには、漢語辞書ではないものが含まれているように見える。「大系」の解題において、「単字字典の性格を有する。山田忠雄は玉篇類に分類し」と記されることがあるように、漢語辞書の研究の先達であられる山田忠雄氏が漢語辞書ではないとされる辞書が、この大系には収録されている。これとは逆に、山田氏が『近代国語辞書の歩み』の附表で漢語辞書に分類しておられる辞書が「大系」に見られないことがある。ところが、それらの理由について、「大系」のなかで十分に説明されていない。私自身は、別巻三に掲載した小論、「明治期漢語辞書の諸相」において収録辞書の整理を少しは試みたが、この時期の漢語辞書の多様性と、これと逆の性格である画一性や、漢語の重層性に触れ、さらには、索引の作成に選んだ『新令字解』『漢語字類』『必携熟字集』『新編漢語辞林』の特色について触れることなどに偏っていて、収録基準といっ

たもつとも基本的なことについてはほとんど触れていない。「大系」が完成した今、監修者・編者の一人として、「大系」に収載した辞書の形態・内容の特徴や、他の辞書との区分判定の基準を明確に示し、そして、収載漢語辞書を整理し、漢語辞書資料中での位置づけをしておくことが責務であると思う。さらに、「大系」の編集後も続いた調査の結果も加えて明治期漢語辞書の一覧を私なりにこの機会に作成しておきたいと思う。表題を「『明治期漢語辞書大系』の基準」とせず、「近代漢語辞書の基準」としたのはこのような理由からである。

辞書を「明治期漢語辞書大系」に収載する基準については、一応は凡例に記されている。この凡例は一つ書きであるが、今は説明の便宜のために番号を付けて記すと次のようである。

- 一、本体系で漢語辞書として取り上げたのは漢語（字音語）を中心としてその読みと語義とを示した辞書体の書物である。しかし、一部に和語や外国地名等を含むものや、語の配列順が意図的ではなく辞書とは言い難い体裁のもの（例「童蒙必読漢語図解」など）も、内容を検討した上で、重要と考えられるものは収載した。
- 二、玉篇・節用集類と合冊になった漢語辞書や、玉篇・節用集・往來物等の頭書さとして掲載されている漢語辞書類は、本体系に収録しなかった。

以上のほかに、第三期配本以後の凡例には次の二条が増えている。

- 三、補遺編は、訳語を集めた訳語辞書（123・124）、一、二期の編集後に入手した漢語辞書類（125―128）、特定の史書、地理書や、小説類読解のための漢語辞書（129―133）を刊行順に掲げた。
- 四、別巻は、主に和語などから漢語を求める辞書類（134・136―140）を収載し、参考として、漢語往來（135）を一種だけ加え、ほぼ刊行順に掲げた。

凡例は大まかに書かれている。可能な限り多くの辞書を収載して漢語辞書刊行の全貌が見渡せるように心がけた。この姿勢は首肯されるべきである。しかし、「大系」が完結した今では次の四つの基準を設けて、さらに多くの辞書を漢語辞書の範疇に入れ、そして、整理し直すべきであると考えようになった。

- 甲、漢語辞書と玉篇や節用集とを区別する基準。これは凡例一や、凡例三に関することである。
- 乙、本体系辞書と頭書辞書とを区別する基準。これは凡例二に係わる事柄である。
- 丙、読解辞書と作文辞書とを区分する基準。これは、漢語辞書の整理に、漢語辞書と節用集との区分とは違う基準を用いることに関することである。
- 丁、漢語辞書が同一であることを判定する基準。これは改題本などは除外し、本体部分の異なる辞書の収録をめざしたことと関係

する条項である。

「大系」の編集・刊行の途中で、この時期の漢語辞書に対する見方が、以前からの疑問がある程度、解明できて、多少、変わったこともあり、また、「大系」の完成後に全体を見直して気づいたこともあって、その結果、辞書の分類基準にも幾分か変化が起こった。したがって、以下で述べることは「明治期漢語辞書大系」での基準と必ずしも同じではなく、また漢語辞書の研究に先鞭を付け、大方の研究方向を示された山田忠雄氏の研究内容とも重ならないところがある。

(二)

まず、甲の「漢語辞書と玉篇や節用集とを区別する基準」について問題点を指摘することから始めるが、その前にここで用いる略記について触れておく。以下で挙げる漢語辞書の後に括弧でくくって記した数字は、「歩み」のように「歩み」に続けたものは山田忠雄氏が『近代国語辞書の歩み』で漢語辞書に対して使っておられる番号である（数字のレベルのみを示しa、bなどで表されている下位分類は省略することがある。「大系」のごとく「大系」の次に記した番号は『明治期漢語辞書大系』で用いたものである。「一覧」とある数字は私が作成した後出の附表「近代漢語辞書一覧」（「一覧」と略称することがある）で付けた番号である。また0番号は掲出・収載されていないことを示す。以下では、できるかぎり「一覧」の番号を使うことにした。「一覧」には『近代国語辞書の歩み』の番号、および「大系」

の番号が対照させてあり、さらに国会図書館蔵本との関係も記してあるからである。なお、書名の前部分の「」の中は角書きである。ただし、小字にはしない。斜線「/」は改行を示す。山田氏の『近代国語辞書の歩み』は「歩み」と略称することがある。

甲の分類基準は明確なようであるが、しかし、個々の辞書の認定になると必ずしも容易ではない。凡例では、「漢語（字音語）を中心としてその読みと語義とを示した辞書体の書物である」ことを漢語辞書であることの主な基準とする。そして、「一部に和語や外国地名等を含むもの」も漢語辞書と認めている。しかし、「漢語（字音語）を中心として」としており、「漢語（字音語）」だけを掲出する書物とはしていないから、「一部に和語や外国地名等を含む」は不要であったかもしれない。要するに、①掲出語の全部、または大部分が漢語であり、②掲出語に読みと語釈が付いていて、漢語の語形と意味とを知ることができれば、③他に、語釈付きの和語や、内外の固有名詞、返読熟字や更に大きい句が混入していても漢語辞書として扱った。ただし、②の条件を満たす部分があれば、全体が節用集や玉篇であっても「大系」に収録したものがあろう。「掌中」早字引集」などがそれである。②であることが漢語辞書の必須条件であり、①であることは、これに次ぐ、と考えた。②の条件を満たしている辞書はほとんどが①でもあるが、両者を同等の条件にすると、漢語辞書の展開が見られないことがあるので、②に重点を置き、特に「近代漢語辞書一覧」では、①の比重を軽くして、②である辞書の収集に心がけた。

「大系」に収載する基準の第二点は成立事情の重視である。その辞

書の編集に先行の特定の漢語辞書が係っておれば勿論のこと、漢語辞書の影響が強いと考えられる場合もその辞書の形態がたとえ玉篇や節用集に近くても、②の条件を満たし、漢語の意味を調べることができ機能が相当程度に存在することにおいて、漢語辞書とし、「大系」にできるだけ収載する方針をとった。「一覽」ではこの方針をさらに徹底させた。漢語辞書群の全体を捉えやすくするためにである。順次掲出辞書も、漢語の掲出が多く、漢語の意味を調べることが可能であれば、また漢語辞書史における役目が大きければ、採用した。近代漢語辞書の出発点となる重要な役割を果たした慶応二年刊の順次掲出辞書、『砲／術』訳名字類』を「近代漢語辞書一覽」の冒頭に配したのは、そのような理由による。また、本邦初の新聞用語辞書であり、漢語辞書でもある順次掲出辞書、『内外新報字類』を収載してあるのも同じ理由による。さらに、形態が辞書と遠いように見える『未味／字解』漢語都々逸』や『童蒙／必読』漢語図解』を漢語辞書に交えて「大系」に収載したのも、その成立に漢語辞書の存在が前提になるからである。近代における漢語辞書の全体像を浮かび上がらせることをめざして、このような配列を試みた。凡例の「内容を検討した上で、重要と考えられるものは収載した」とは、このような意味である。また、『日本外史』など漢籍史書を読解するための辞書を収録したのも、近代漢語辞書史の早い段階で漢籍読解のためにも役立つ辞書の編集が視野に入っていることを確認してのことである。さらに『輿地誌略字解』『輿地誌略熟字解』のように特定の地理書を読解する辞書や、『雅俗漢語訳解』『小説字林一名支那俗語集』のごとき中国俗語辞書を「一

覽」に掲げ、また「大系」に『輿地誌略字解』『雅俗漢語訳解』を収載したのも、当時よく読まれた書物と漢語辞書との関係をも考えてのことである。『輿地誌略』は当時のベストセラーであったこと、また法律書は、政府が早く箕作麟祥にフランス法律書の翻訳を命じ、用語を整備させたが、最初に制定されたのは中国系の刑法典、『新律綱領』、後に『改定律令』であったことを前提としている。さらに、山田美妙が『漢語／故諺』熟語大辞林』の引用書に『英華字典』（ロブシャイド編）や『申報館英華字典』を挙げていることなどを踏まえてのことである。『大系』の編集、「一覽」の作成は当然のことながら漢語辞書の研究成果を踏まえて行った。

漢語辞書のこのような内容中心、編集目的重視の、しかし、やや大まかな分類基準に対して、辞書の形式を中心に厳密な基準を立てられたのは山田忠雄氏である。山田氏の分類基準は次のようである。

- (Ⅰ) 熟語の包含度
- (Ⅱ) 熟語見出しに一格を与えるか
- (Ⅲ) 物の名・固有名詞を含むか
- (Ⅳ) 語釈

まず、Ⅰについて見ると、漢語辞書・玉篇・節用集は次のように違うとされる（山田氏は、これら三種類の辞書を問題にされるとき、漢語辞書・節用集・玉篇の順序に並べられるが、私は漢語辞書に近いのは、節用集よりは玉篇であると考えるので、以下では漢語辞書・玉

篇・節用集の順に改めて、引用する。

漢語辞書Ⅱ新時代使用の熟語を主とし、間々漢文訓読用の単字を交える。

玉 篇Ⅱ単字見出しの用例として、熟語・熟字を掲げることが有る。

節用集Ⅱ単字・熟字に不拘単語を見出しとし、間々字音語の造語成分をも掲げる。

山田氏の、漢語辞書・玉篇・節用集に対する規定は、これら三種類の辞書の区別がいかに難しいかを示している。「包含度」とは、辞書に掲載された熟語数(漢語数)・熟字数の割合と理解してよいであろうが、その点から見れば、玉篇では、(単字を掲出するのが本来の形態であり)、熟語・熟字は掲出単字の用例として掲げられることがある程度である。したがって、その数は少ないと言われる。節用集では、(玉篇のように熟語・熟字の構成成分である単字を掲出するのが本来の姿ではなく)、単語を掲出するのが本来の形態であるとされる。ここでは熟語・熟字の掲出の多少は基準ではなくなっている。そして、漢語辞書では、熟語が主として掲出されるという点で、その掲出の多少が基準になっていて玉篇と同一基準である。ところが、漢語辞書ではさらに、その熟語が主として新時代使用のものであるという基準が加わっている。このように見えてくると、三種類の辞書を分類する基準が微妙にずれていることが分かる。漢語辞書と玉篇だけであるならば、

玉篇では熟語・熟字の掲出されることが一般的には、全くないか、あっても少ないかであり、一方、漢語辞書では、全部、または大部分が熟語・熟字であるのがその典型であると言いつける。しかし、節用集になると、熟語・熟字の掲出の多少を基準にしては規定がむづかしくなる。まして、新時代使用の熟語が多いか否かの問題になると、漢語辞書の掲出語についてさえ検証できるかどうか疑問である。Ⅰの基準だけでは漢語辞書・玉篇・節用集の区別をすることは困難である。山田氏が「この三者の別に就いては結局次のような関聯を考えざるを得ないのではないか？」とⅠからⅣまでの関連で判別せざるを得ないことをクエツションマーク付きで嘆いておられる理由はそこにある。日本辞書史研究の泰斗であられる山田忠雄氏をかく悩ませ、かく慨嘆せしめた明治期の辞書群は伝統的な辞書の分類基準では律しきれない。ここには不透明さがある。しかし、それは極めて重要なことである。なぜならば、これは、慶応二年以降、漢語辞書が出現して、従来からある玉篇と節用集を席卷し、その影響の強弱によって辞書に種々の変異を生じさせた結果としての、新時代を反映した事態であるからである。

次に、Ⅱについて見る。

漢語辞書Ⅱ語毎に改行し、一格を与えることを宗とする。

玉 篇Ⅱ頭を揃えはするが、一格を与えないことが多い。
節用集Ⅱ改行を施すこと無く、追込みを宗とする。

この基準による三種の辞書の区別にはほとんど迷うことがない。玉篇では単字が掲出され、下にその単字を含む熟語（熟字も）が並べられることがあっても、熟語・熟字は追込みであるのが通常である。枠が与えられるのは大きく太く書かれる単字と、その下の韻と訓である。熟語・熟字は小字・細字で詰めて記されるのが普通の形態である。節用集では、上の語と下の語とを分ける横線はなく、掲出語が追込みであることは通常の形態として認めてよい。これらに対して漢語辞書では掲出語（語釈付き）が一定の枠内に収められるのが普通である。掲出語によって枠の長さが違うことがあり不分段のこともあるが、語と語との間に境界の横線があり（行の境を示す縦線は玉篇・節用集にもある）、一語一語が枠に囲まれていて、掲出語は二字漢語が大部分であるから漢語辞書は整然とした体裁になっているのが通常である。

Ⅲについては次のような相違が認められるとされる。

漢語辞書Ⅱ載せる場合も、何程かの解説を伴う。

玉 篇Ⅱ固有名詞の訓みを示すこと有り。

節用集Ⅱ訓みを掲げるに止まる。

この基準による判別もしやすい。物の名や固有名詞を掲げるのは節用集であることは一般的に言えることである。玉篇にも固有名詞が記載されることがあるが、これは明治期になってからであり、新形態であることは留意しておいてよい。一方、漢語辞書では物の名や固有名詞の掲出が少ない。ただし、外国の地名に関して言えば、玉篇・節用

集に比べると多い。「明治期漢語辞書大系」の凡例に外国地名を含む漢語辞書があると断った理由はここにある。しかし、外国の地名を記す玉篇や節用集も、明治期には出現するから決定的な基準とは言いがたい。^注

Ⅳの基準による判定は次のごとくである。

漢語辞書Ⅱ全項目に備えることを宗とする。

玉 篇Ⅱ熟語には之を施し、熟字には示さず。

節用集Ⅱ言語所属の語に稀に施すが、その他は文字毎に別訓を示すに止まる。

この違いも、ほとんど問題がない。漢語辞書では必ず語釈が付いており、また、玉篇の熟語もそのとおりである。しかし、熟字に語釈を付すものも存在する。また、節用集についても言語門に語釈付きの漢語を掲出する辞書が出て来る。山田氏は言語門に属す漢語には語釈を「稀に施す」と言われるが、この部分に対する編者の意図、またわれわれの評価が問題となる。このことについては後述するが、一般的には山田氏の言われるとおりである。

それでは、右の四つの基準により、また、これらに関連させれば漢語辞書・玉篇・節用集が簡単に区別できるかといえ、そうとは限らない。山田氏も分類に迷われた辞書があり、一度は漢語辞書に分類されたのを後に玉篇に移された辞書が一点ある。^注このうち、二点は「大系」に収載している。理由は、『輿地誌略字解』（一覽074）を例に

とれば、次のごとくである。この辞書は掲出語の頭字を画数順に配列したもので、形態は、大書した頭字の右側、時には左側にも漢字音を示し、単字の下に字訓を並べる。次に熟語・熟字を小字・細字で追い込みで記す。『輿地誌略字解』は字訓の記載までは玉篇に近い。しかし、この辞書は近世・近代の通常の玉篇と次の点で異なっている。

ア、韻の表示がない。

イ、字音の表示が少ない。

ウ、字訓の表示が少ない。

エ、掲載された熟語・熟字の数が多し。

オ、単字だけの掲出が少ない。

ア以外は相対的なことであるが、この辞書はエであることに特色がある。また、オも特徴の一つに挙げてよい。一七七二の掲出単字のうち熟語・熟字が記されないのは二〇四字である。多くの単字に熟語・熟字が伴うので単字はあたかも標出字、または索引字であるかのような役目を果たしている。そのために漢語辞書に分類した。『名乗／相性附』日本外史国史略字類（一覽119）、そのほか、『新撰歴史字典』（一覽151）・『熟字／音訓』小学字典（一覽151）なども同じ理由で漢語辞書とした。特に熟語・熟字が多いことを評価してのことである。なかでも、『新撰歴史字典』は熟語・熟字を先行の漢語辞書から継承していることで漢語辞書から外せない。

山田氏は、漢語辞書から玉篇へ移された一一点について、その理由

を記しておられないが、いくつかの辞書については右の基準を当てはめながら分類の仕方を具体的に示され、判定された理由を述べておられる。たとえば、『歴史字引』（東条保編、三巻三冊。一覽090）は、下巻は『日本政記』『日本外史』『国史略』『皇朝史略』の固有名詞を編次順に掲出するに過ぎないが、上巻と中巻は純然たる漢語辞書の形態であるので、Ⅲの基準には合わないけれども、これを漢語辞書と認定すると言われる。そうであれば、Ⅲの基準は必ずしも必要ではないことになる。これは適切な判断である。なお、山田氏はこの『歴史字引』を純然たる漢語辞書と言われるけれども、上巻・中巻では掲出語は一語一語に枠が与えられず追い込みで記されているからⅡの基準にも合わない。しかし、漢語の意味を調べることのできる辞書であるから、漢語辞書であるとのこの判定に私は賛成である。次に問題にしておられる『世界節用無尺蔵』（一覽049）について、山田氏は、『世界節用無尺蔵』は掲出語が追込みであって、その点ではⅡの基準に反するが、Ⅰ・Ⅳの基準に合致するので漢語辞書であることは疑いを容れる余地がないといわれる。そうであるならば、漢語辞書であるか否かの判定にⅡの枠についての基準は必ずしも必要がないということになる。Ⅲの基準も、先に『歴史字引』で見たように必須条件ではないから、結局、漢語辞書を玉篇および節用集と区別する重要な基準は、Ⅰの熟語を主として掲出していることと、Ⅳの熟語に語釈が付けてあることの二か条であるということになり、私の基準①②と同じになる（新時代漢語辞書であることを重視すると『歴史字引』が脱落することく明治期漢語辞書の多くが疑似漢語辞書になってしまうから、この基準の適

用は慎重にする必要がある。『世界節用無尺蔵』が漢語辞書であることは、この辞書が、純然たる漢語辞書である『新撰字解』（中村守男編。一覽045）の増補・改編本であり、間接的には『増補新令字解』（東条永胤増補。一覽032）を承け、さらに遡れば『新令字解』（一覽005）と『漢語字類』（一覽011）とを継承して編集された辞書であることからも言えることである。この『新撰字解』は、掲出語の振り仮名の第一字目をイロハ順で配列し、次に掲出語を頭字で類集しており、一面（二ページ）は原則として一二行二段の構成にした辞書である。この配列を『世界節用無尺蔵』では段を取り払って追込みにし、語釈の位置を、掲出語の下から掲出語の左に移して、その結果、掲出語の左右に仮名文字が小字で記されているという、一見、節用集に似た形態に編集し直されている。『漢語』開化節用字集（一覽077）の場合も同じである。この辞書も『新撰字解』を全面的に継承して成立しているから漢語辞書であるが、境線はなく追込みである。これらの辞書を一語一語が枠内に収まっていなことを理由に節用集に分類すると、辞書の本質を見失うことになる。山田氏と必ずしも基準は同じではないが、分類は結果的に同じである。

山田氏と分類が違った辞書に『掌／中』早字引集（一覽029）がある。この辞書について、山田氏は、熟語に関する限り最も漢語辞書的であると漢語辞書の一面を持つことを認めておられる。しかし、物の名や、大部分の単字に別訓を示すのでⅣの基準に従って節用集に属すと判断された。確かに、『掌／中』早字引集が節用集の性格を濃厚にもっていることは、その成立からいって、そのとおりである。この

辞書は純然たる節用集、『増補／早引』文宝節用集（文政一二年発行、天保一一年秋再版）を基にして成立している。この節用集のイロハ各部の冒頭に、漢語辞書である『漢語字類』の掲出語を詰め込んで編集しているのが、『掌／中』早字引集であるから、節用集の側面と、漢語辞書の側面の両方を兼ね備えている。したがって、節用集にも、また漢語辞書にも分類し得る内容をもっているのであるが、近世の辞書を明治期の辞書に変貌させたのは漢語辞書部である。そして、書名の頭に「布令日誌必用」の文字を付けさせ、また、別名を「御一新字引」と名乗らせる根拠を与えたのも漢語辞書部分である。よって漢語辞書の部分を評価して漢語辞書に属させた。全体としては節用集の形態をとりながら漢語の意味を調べる機能を、しかも先行の漢語辞書によって増やしたところにこの辞書の特色があるからである。

山田忠雄氏は、漢語辞書・玉篇・節用集を入れる三つの袋を用意され、客観的な立場で一定の条件に従って辞書をそれぞれの袋に入れようとされた。一方、私が用意した袋は漢語辞書を入れる大きめの袋だけで、漢語辞書との関係のみで辞書を選別した。この立場の違いは第三節以下でも辞書の認定の違いとして現れることになる。

『掌／中』早字引集とは逆に、山田忠雄氏が漢語辞書として附表に掲げておられる辞書で、「近代漢語辞書一覽」に掲載せず、また「明治期漢語辞書大系」にも収載されていない辞書の一つに『両点作文いろは節用』（歩み364）がある。この辞書は和語の掲載が多い。イロハ部では漢語一七二語、和語一三六語、混種語一八語であって、漢語の方が少し多い程度に過ぎない。ハ部では漢語が一二七語、和語が一〇

二語、混種語が二五語である。外来語も一語掲載されている（「巴厘斯」）。部によって漢語と和語の比率は違うけれども全般的に見て漢語が圧倒的に多いという訳ではない。そのうえ、語釈も少ない。掲出語の左側の振り仮名を下に移して示すと、「位階クライ、委曲クワシク、医者クスシ、異名カヘナ、因循グズク、拝謁オメニカル、配布クバル、博識モノシリ、白昼マヒルナカ、繁多イソガシ」のごとき語釈と考えられるものが記されていて注目される（掲出語の右側の振り仮名は省略した）。しかし、このようなことはきわめて稀で、大部分が「維新コレアラタ、意味コ、ロアジ、引用ヒクモチユ、破産ヤブレウマル、繁華シゲシハナ、万民ヨロツタミ」のように字訓が並べられているに過ぎない。また、和語の掲出語には左側に、その漢字の音が当てられているのみで語釈はない。これらは山田氏が立てられた漢語辞書の基準ⅠおよびⅣに合わないし、また「大系」の基準とも一致しないので、この辞書は除外した。『初学／必携』作文いろは字引（歩み363）も熟語には語釈が付いておらず、節用集であるので、漢語辞書に入れなかった。

なお、山田忠雄氏が附表に漢語辞書として掲げておられる辞書で、削除するのがよいと判断されるものに次の三点がある。

『漢語／文章』熟字早引（原田道義編、明治八年九月届。歩み73、大系52）

『普通漢語字類大全』（下村孝光編、明治十六年六月刊。歩み135）

『大全漢語字引』（大草常章編、明治二十三年八月、歩み200、大系140）

近代漢語辞書の基準

二番目に記した『普通漢語字類大全』は最初の『漢語／文章』熟字早引の改題本で、書名と編者名を変えただけのものである。これらは通常語・和語から漢語を探す一種の用語辞書・作文辞書であって、漢語の意味を調べるために編集された辞書ではないので漢語辞書のリストから外すべきである。しかし、漢語と係わりがあるので、「明治期漢語辞書大系」ではこの種の辞書を参考資料として別巻一・別巻二に収録することになっている（凡例四）。ところが、『漢語／文章』熟字早引だけが本編に混入してしまった。これは意図的な収載ではない。もし、この種の辞書を本編に収録するとすれば、別巻一に収めている『掌／中』漢語早引（松屋貫一編。明治六年六月刻。大系136）を選ぶべきである。なぜならば、この辞書は漢語辞書と関係が深く、また明治になって編まれた最初のこの種の辞書であるからである。

『掌／中』漢語早引では次のように通常語と漢語とが対応している。

ごろつちやら	碌々
ぞつかし	苟且
つ、かけ	突然
きみにいけんするやく	言責
くにをたやすくとる	吞滅
たいせつなつかひやく	使節
ちがわぬ	的当

ちらばる
 解散
 かきぬき
 抄撮
 みさほのためにし、たよめ
 烈婦

これらの上の語は、俗語であったり、漢語に対して意味が少しずれていたりして、どちらかといえば、下の漢語と特異な関係にある。ところが、『新撰字類』（松屋貫一、明治三年刊。一覽028）に、これらと一致、または類似する語釈をもつ掲出漢語が見出される。

解散	ちらばる
言責	きみにいけんするやくめ
苟且	ぞろつかし
使節	たいせつなつかひやく
抄撮	つまんでかきぬく
的当	ちがわぬ
突然	つ、かけ
吞滅	くにをたやすくとる
烈婦	みさほのためにしんだよめ
碌々	ごろつちやら

右のことは、『掌／中』漢語早引の編集に『新撰字類』が資料の一つとして使用されていることを示す。両辞書の編者は同一人と考えられるから、この関係は間違いない。『掌／中』漢語早引の本文の

最終丁の裏に掲載されている広告に『新撰字類』が挙げられていることも前者が後者に拠っていることを暗に示しているのであろう。

俗語字類 全一冊

漢語字類は字画ヲ以テ漢語ヲ索引スルノ用ヲ便ニシ新撰字類ハ漢語ヲ聞テ而後之ヲ索引スルノ用ヲ便ニス今此俗語字類ニ於ルヤ俗語ヲ知テ漢語ヲ知ラザル者ノ便ニ供ス故ニ朝暮此書ヲ翫弄スレバ数多ノ漢語ヲ記憶シ終ニ師ヲ待ズシテ漢籍ヲ独見スルニ至ル俗家必用ノ書ナリ

『漢語字類』と『新撰字類』はともに漢語辞書で、漢語の意味を調べるための辞書である。一方、広告の『俗語字類』は俗語から漢語を採る辞書であるという。そうであれば、『俗語字類』の内容は『掌／中』漢語早引と同類であるということになる。『掌／中』漢語早引とは別個に同じ内容の『俗語字類』が編集されたのであろうか。それとも、広告文まで用意されたが、『俗語字類』では俗語の意味を調べるための辞書であるように内容が誤解されるおそれがあるので、急遽、書名を『掌／中』漢語早引と取り替えるといった事情があったのであろうか。どちらであるか判断に苦しむが、『俗語字類』の存在を今のところ確認できないから、おそらく後者であろう。当該書物の広告がその本の末尾に出されることは少なくないにしても、単独の広告は珍しい。何らかの特殊な事情があったのであろうが、庄原和が編集した部首順の『漢語字類』を、イロハ順・振り仮名数順に配

列し直して『新撰字類』を編集した松屋貫一は、さらに、この『新撰字類』を資料の一つにして漢語辞書とは別種の、しかし、漢語と関係の深い漢語学習辞書、あるいは作文辞書と呼べる辞書を、初めて編集しているのである。当時、大活躍の啓蒙家にふさわしい着眼である。この『掌／中』漢語早引』を本編に収載することは他の辞書と比べると基準に外れるにしても、この種の辞書を見本として本編に収録するとすれば、成立に漢語辞書が直接に係わっている『掌／中』漢語字類』である。

(三)

乙の「本体辞書と頭書辞書とを区別する基準」については、「明治期漢語辞書大系」では、凡例二に記してあるように頭書の漢語辞書は収載していないから問題がないように見える。頭書とは、本体の上部にあつて、本体と別の、しかし、関連のある内容で、分量が本体の五分の一から三分の一程度の部分を指すとすれば、分量や位置からも、また内容からも、本体との区別が困難であることは、普通はない。しかし、頭書であるか否かは必ずしも明確な基準がなく編者によって、その扱いに違いがあり、単純でない。いわゆる「頭書」も本体と考えざるを得ない場合がある。

『頭書／画引／類語』明治いろは字引大全（一覽189）は一面が上段と下段に分かれており、下段の標題は右の「明治いろは字引大全」である。組織は一面が一二行、四段（二字漢語の場合）であり、縦の長さが八五〇ミリである。一方、上段は標題が「頭書画引類語大全」、

組織は一五行、三段（二字漢語の場合）であり、縦の長さは五五〇ミリである。上段は「頭書」と記されているから、編者はそのつもりで編集していることは間違いない。ところが、本体である下段と、頭書の上段とは紙面の分量で言えば約八対五で大差がないから、掲出語数も下段が一五一八語、上段が一四二五五語で、さほど違わない。この辞書では本体辞書と頭書辞書との関係は、占める面の広さや掲出語数では大きな違いがなく、配列の異なる二種類の辞書が上下に存在するというだけのことである。ところが、書名は一つである。上段の辞書は独立していないから辞書のリストから消えることになる。山田氏の附表に『頭書画引類語大全』という辞書は記載されていない。「明治期漢語辞書大系」の「漢語辞書書名索引」でも同じである。これは不合理である。「頭書画引類語大全」は、下段の辞書がイロハ配列であるために補完関係にある部首配列の辞書として上段に置かれている。下段の引き方を補うための辞書である。下段と上段は掲出語・語釈が同じとは限らないが、引き方の便宜が考えられて二種類の漢語辞書として合本になっていると考えるべきである。通常は合本とは異種の複数の辞書が合綴されているものを指すが、この場合は、同種の二種類の辞書が、前後にはなく、上下に合本にされている。このように考えられるから、「頭書画引類語大全」（「画引類語大全」と呼ぶべきか）は漢語辞書の一本と扱ってよい。

同様の問題が『漢語画引便覧』（一覽124・125）にもある。本書が上下二段に分かれている点では『明治いろは字引大全』と同じである。違うのは上段が頭書と呼ばれていないこと、そして、上下の組織が一

五行、二段（二字漢語の場合）であつて、まったく同じであることである。したがつて、掲出漢語数は上下段ともほぼ同じで下段が六二九六語、上段が六〇八一語である。本書は、下段が五十音配列、上段が部首配列であるから、配列が補完的である二種類の漢語辞書が合本になつていふと言つてよい。したがつて、『広／益』熟字典に『広／益』熟字典画引部（二覧057）と、『広／益』熟字典仮名引部（二覧078）の、掲出語の配列が異なる独立した辞書があるごとく、『漢語両引便覧』にも『漢語両引便覧画引之部』と『漢語両引便覧仮名引之部』の二種類の漢語辞書の存在を認めるべきであらう。補完関係の二種類の違つた配列の辞書を一書内に備えて「両引き」にしたところが、まさしく、この辞書のセールスポイントで、これを広義の合本と呼んでよく、それぞれに独立させると「両引」という書名は変であるけれども、二種の辞書の存在を認めてよい。

これと同じ理由で『自由熟字在』（二覧149・150）の中にも二種類の辞書が併存すると見てよいであらう。本書は、下段が五十音配列の「早引之部」、上段が部首配列の「画引之部」であり、組織はともに九行で、段数は二字漢語で数えると両方ともに三段である。したがつて、掲出漢語数もほぼ同じで下段が五九一三語、上段が五三七九語である。この辞書においても、『自由熟字在早引之部』と『自由熟字在画引之部』が合本になつていふと考へてよい。したがつて、これらを漢語辞書としてリストに加えて問題はない。

頭書が決して附録的な存在でないことは『漢／語』両点早字引（稲葉永孝編、一四年七月届。一覧181）がよく示している。本書は、

縦三分の二を占める下方に手紙や届書の模範文が記されており、その上の三分の一の部分に漢語辞書部がある。両方ともに標題はない。しかし、前者には尾題があつて、「明治要文章」と記されている。漢語辞書部は上方にあり、また分量が少ないことから頭書と言つてよい。ところが、題簽には「漢／語」両点以呂波字引とあつて、その下に「要文章／諸届類」と書かれている。漢語辞書部が重視されて、それが書名になつていふのである。見返しにも「漢語／両点」以呂波字引」と記されている。また、要文章・届書の目次には「漢語両引以呂波字引附録目次」とある。ここでは、「明治要文章」は明確に附録として位置づけられており、上方の三分の一に記されている頭書と言へる漢語辞書部が本体とされているのである。頭書と一般に呼ばれる上欄に位置していても附録であるとは限らない。これらの点からいへば、用文章の頭書は漢語辞書の研究には見逃せない。玉篇・節用集の頭書も同様である。そこで、後出の「近代漢語辞書一覽」では、頭書漢語辞書を山田忠雄氏のリスト注12に基づいて確認できたもの、および独自に調査できたものを掲げた。山田氏が列挙されたものすべてを採らなかつたのは、氏が「透間・祝・意スキマ・イハヒ」のような語を掲出した頭書辞書をも挙げておられ、私の基準と違ふかもしれないからである。

これらの頭書漢語辞書で、独立して編集されたものは少数である。用文章の頭書漢語辞書については、『四季文章』の頭書「漢語字解」（一覧59）が先行の漢語辞書を承けて成立していると既に指摘されている。ただし、この場合、『増補新令字解』を継承しているとするのは問題である。注13この期の漢語辞書の系譜の確定は類似の漢語辞書が多

くてむつかしいが、正確には「漢語字解」は『新撰字解』を継承しているとすべきであろう。『新撰字解』は『増補新令字解』を承けて編集されているから掲出語のほとんどが語釈とともに両者で共通する。しかし、前者には後者と違うところがあり、そこが「漢語字解」と多く一致するので「漢語字解」は直接には『新撰字解』を継承していると断定してよい。このように、頭書の漢語辞書には単行漢語辞書を承けて、掲出語を増補あるいは抜粋、また語釈を変えて成っているものが多く、新たに内容を開拓した辞書は少ない。しかし、用文章の頭書漢語辞書は次節で説明するように用字字典・作文字典としての機能の外に、読解辞書としての機能も期待して掲出されている。また、玉篇や節用集の頭書漢語辞書は下段(本文)辞書と合本になることによつて多用途辞書を構成している。分量の少ない場合もあるが、質的には単行の漢語辞書と同様に、価値ある存在であった。頭書漢語辞書は、国語辞書がほとんどなかった時代にあつて、その出現の願望として本体の上部に置かれている。このように、いわゆる頭書漢語辞書を位置づけることができる。

(四)

丙の「読解辞書と作文辞書とを区別する基準」は、漢語辞書と節用集を区分するのは別の基準であり、文章を書くときに漢語を多用するようになったことを背景にして編集された辞書との関係で必要になつた基準である。

第一節で、山田氏の附表に掲げられていながら「近代漢語辞書一

近代漢語辞書の基準

覧」に掲載せず、また「大系」にも収めていない辞書として『両／点』作文いろは節用」と『初学／必携』作文いろは字引』の二点を挙げた。理由はこれらが「作文」するときに用いられる伝統的な節用集であり、漢語の意味を調べる辞書と言えないからである。ところが、後出の「近代漢語辞書一覽」に「作文」という文字を書名にもつ次のような多くの辞書が掲出されており、また「大系」にも数点が収載されている。

『漢和作文字類』 村田徽典編、明治九年八月刊(一覽110)

『漢語』作文自在』 塩見文準編 明治二十年十一月刊。尾題

「和訓漢語尺牘自在」。 (一覽215)

『万民宝典』漢語作文字引大全』 梅乃家薫(綾部乙松)編、

明治二十五年四月刊。『有益／活用』新選独学全書』の上段に収載されている。合本とすべきか。中段は「明治いろは節用」、下段は「掌中新撰字林玉編」。見返には桜井貢編とある。

(一覽232)

『万民宝典』漢語作文字引大全』 梅乃家薫編、明治二十六年

八月刊(一覽248)

『万民宝典』漢語作文字引大全』 綾部乙松編、明治三十八年

七月再版刊（一覽297）

『漢語類字』作文いろは字引大成 井上勝五郎編、明治二十

七年六月刊（一覽257）

『日用／書翰』作文字引大全 稲生輝雄・片山福三郎編、明

治二十七年二月刊、（一覽252）

『漢語字解』作文いろは字引大全 近藤延之編、明治二十八

年一月刊（一覽259）

『明治／実用』作文字典 服部喜太郎（鳳鳴散史）編、明治

二十八年五月刊（一覽261）

『作文新辞典（漢語）』 中村巷編、明治三十九年一月刊。漢語

編と国語編から成る。（一覽299）

『漢和作文字類』は、書名に「作文」という語が使われているが、すべての掲出語に語釈が付いていて、しかも掲出語のほとんどが漢語であり、この点で、読解辞書としての漢語辞書の条件を備えている。

八部は次のように始まる（掲出語は行書で、その右に読み、下に横書きで小字の楷書があり、その下に語釈が記されているが、これらは省略する。また、頭字が同じ時は、一で示されているが、次では頭字を

繰り返し記す）。

万喜・万縷・万事・半子・半価・佩荷・婆心・売利・場合・薄儀・薄暮・発途・発話・繁多・繁務・破談・破産・破滅・法度・煩務・煩苛

以上が、振り仮名が三字の掲出語のすべてである。この中で和語は一語だけである。次に振り仮名が四字のものについて見ると、これに属するのは九〇語である。そのうち漢語でないのは次の六語に過ぎない（右側の振り仮名を括弧のなかに入れて記す）。

不レ凶（はからず）・烈敷（はげしく）・果敢（はかゆき）・恥入（はぢいり）・為レ撥（はつたり）・将又（はたまた）

振り仮名が多くなるにつれて和語の率が増え、振り仮名が六字の掲出語では、「難レ計（はかりがたく）、甚敷（はなはだしく）、墓々敷（はかばかしく）、乍レ憚（はゞかりながら）、梅雨不勝（ばいうふしやう）のように五語のうち四語が和語である。しかし、八部全体では和語は一三語に過ぎない。漢語が一二六語のうち一一三語で、全体の約九〇パーセントを占めるから、この辞書は漢語の意味を調べる辞書として使える。しかし、表記字典であることに間違いなく、それは掲出語が行書と楷書で記されていることに示されている。漢語の意味を調べるためだけの辞書であるならば、二種類の字体は必要ない。その

ほか、和語の掲出語は全般に消息用語の色彩が強く、漢語であっても、「廃業・配偶・発会・半子・発熱・発明・薄暮・発歳・晩刻・晩年」など人事・時候を表すものが多数を占めること、さらに八部には、「拝啓・拝容」など「拝」を頭字にする敬語が一二語も掲出されており、八部でも「芳慮・芳命」など「芳」を頭字にもつ敬語が五語、「奉命・奉答」など「奉」を頭字にする敬語が五語、記されていることから、書状を書くときに利用される辞書の性格も持っていると言える。この辞書は表記字典と漢語辞書との両方の性格を有している。

ところで、同じ編者が編集した辞書に『雅俗節用』（一覽Ⅲ）がある。これは『漢和作文字類』と同版木の、同じ刊年をもつ辞書である。題簽に「漢和作文字類」とあり、題字も同様である。ただ、柱題がなく、また「漢和作文字類索引法」が「索引表」に改められていることだけが相違であるから、『雅俗節用』は『漢和作文字類』の改題本と呼んでよい。この辞書の編者の出版意図は、凡例がないので明確ではないけれども、この書名から推して表記字典・作文辞書として出版されているのではないかと思われる。しかし、先ほども言ったが、この辞書が漢語の意味を調べるためにも有益であることは確かである。そのために、星唯清がこの版木を使って『開化掌中早引』を出しているのである。この辞書の書名からは編者の出版目的は分からない。しかし、凡例に、

今や世人の善く用うる所の文章は大抵漢語を挟まざるはなし然れども僻邑地の人は其の解に苦む者なしと謂ふべからず故に予今世

近代漢語辞書の基準

普通の俚言漢語を編集して一々略解を施し以て浅学の人に益あらしめむと欲するのみ

と記しているから、編者はこの辞書を読解辞書として出版している。もともと作文辞書として編集された辞書を、改題して漢語辞書として売り出しているのである。したがって、漢語辞書と作文辞書とは内容の上では区分の基準が明瞭ではないということになる。山田氏が『開化掌中早引』を漢語辞書としておられるのも、また「大系」が『雅俗節用』と『開化掌中早引』を採録しているのも理由のないことではなかったのである。ただし、「大系」で両方を収載する必要はなかったかもしれない。これは次節で取り上げる問題である。

『開化掌中早引』は凡例によると読解辞書として出版されている。しかし、編者が漢語の「解」のためだけにこの辞書を刊行したかという点、それは疑わしい。なぜならば、『開化掌中早引』には辞書部の後に模範書簡文が附録として掲載されているからである。この附録と凡例の内容とは呼応しにくい。読解辞書と、書簡文集とは釣り合わないのである。このことを解く鍵は、『開化掌中早引』の前身が表記字典であったということを編者が知っていたことに求められよう。編者の星唯清は凡例で読解辞書として『開化掌中早引』を出版すると書いてはいるが、表記字典としても使えることを承知の上で模範書簡文を附録にしていると考えられるのである。読解辞書としても使える表記字典を用文章の頭書にするのと同じ関係で、表記字典にも使用できる読解辞書と用文章とを合綴したのである。このように解釈することに

よって『開化掌中早引』の構成を理解することができる。『開化掌中早引』の辞書部分と用文章部分との関係は、用文章とその頭書辞書との関係と同じなのであり、上下に配置するか、前後に合綴するかの違いに過ぎない。

『漢語類字』作文いろは字引大成』は、ほとんどの掲出語に語釈が付いていることでは読解辞書といってよい辞書である。しかし、八部では二二八語のうち約半数を和語と混種語が占める。しかも、一字の和語に対しては語釈を付けず、「魅まキツネタヌキノ」「梁は家ノ」のようにその字の意味の大枠を示すか、多くの場合は字音を示すに止まる。これらは節用集の特色である。また日本の固有名詞を掲出するのも節用集に近い（イロハ各部の最後に集める）。山田氏は「和語を多く交へる」としながらも漢語辞書と認めておられるのは漢語の意味が調べられるからであろう。「大系」に収録している理由も同じである。

『万民宝典』漢語作文字引大全』（一覽248）は書名に「作文」の文字があるにもかかわらず掲出語に和語がなく、すべてが漢語である。しかも語釈が全部に付いている。凡例にも、

此編乃チ音ヲ以テ字ヲ探リ逐一其下ニ字解ヲ識ルコトヲ要シ且熟字ノ通語ニ從ヒ所々ニ挿画ヲ加ヘ以テ解シ易カラシメ童蒙ノ便ニ供ス

とあるから、この辞書が読解辞書として編集されていることは間違い

ない。実はこの辞書は『改正／増補』漢語新画引大全』（片岡賢三編、明治二十年七月刊。一覽211）の改版、改題本である。凡例も『漢語新画引大全』を利用してしている。自叙でさえも最後の部分の、「明治二十年」云々を「明治二十六年」云々に改め、「片岡賢三識」を「編者識」にする程度にしか手を入れていない。梅乃家薫（綾部乙松）は、まず明治二十五年に『漢語新画引大全』を縮約して『有益／活用』新選独学全書』の上段に「漢語作文字引大全」（一覽232）と名付けて掲載し、その直後に『漢語新画引大全』の全体を改版して『漢語作文字引大全』（一覽248）を出版しているのである。さらに再版本を出している。このように辞書の系譜を見てくると、本書はまさしく漢語辞書である。では、なぜ「作文字引」と命名されたのが問題になる。

『漢語』作文自在』も右と同様の辞書である。掲出語はすべてが二字漢語であり、それに語釈が付いているので漢語の意味を調べるのに利用できる辞書である。配列は、後半はほぼ掲出語の振り仮名の第一字目をイロハ順にしてあるが、前半は、冒頭部分が「開化・文明・勉励・発明・盛大」のように始まり、順不同であって使いにくい。編集目的のはっきりしない辞書である。しかし、尾題が「[和訓／漢語]尺牘自在」とあるから手紙を書くときに使われることを目指したのであろう。そうになると、作文辞書と漢語辞書との別をどこに置いてよいのか判断がしにくい。

『漢語字解』作文いろは字引大全』も、『万民宝典』漢語作文字引大全』などと同様に漢語辞書と作文辞書との区分基準が不分明であることを示す辞書である。イ部は次のように始まる（合字は通常の仮

名に改めて記した。以下でも同じである。

- 一新 サラリトアラタマルコト
- 一洗 上二同ジ
- 一臂 ヒトチカラダスコト
- 一致 モノガヒトツニサダマルコト
- 一隊 イクサノ一ソナヘノコト
- 一流 ヒトツナガレト云フコト
- 一和 ニンキガソロフ

これは明治五年に刊行された『増補布令字弁』（一覽094）の掲出語と重なる。『増補布令字弁』の冒頭は次のようになってゐる。

- 一新 サラリトアラタマルコト
- 一洗 上二同ジ
- 一般 イツタイト云コト
- 一臂 ヒトチカラダスコト
- 一泊 一夜トマルコト
- 一致 モノガヒトツニサダマルコト
- 一同 一ニオナジクナルコト
- 一隊 イクサノ一ソナヘノコト
- 一流 ヒトツナガレト云コト
- 一戦 ヒトイクサ

近代漢語辞書の基準

- 一併 イツシヨニスルコト
- 一和 ニンキガソロフ

八部を見ると、『漢語字解』作文いろは字引大全』では最初の部分
は次のように配列されている。

- 撥乱 ランヲヲサムルコト
- 敗毀 ヤブリコボツコト
- 跋涉 山川ヲコエワタルコト
- 藩屏 ダイミヤウノコト
- 陪従 トモマハリ
- 藩主 トノサマト云コト
- 藩籍 ヤシキノ人別帳
- 藩号 ヤシキノナマヘ
- 陪臣 マタゲライ
- 廢去 ステサル
- 廢止 ヤムルコト
- 廢典 スタリタルオキテ
- 舶来 グワイコクヨリワタリテキタコト

これは『増補布令字弁』とほとんど同じである。『増補布令字弁』では、「廢去」と「廢止」の間に「廢失スタリウシナフ」があり、「撥乱」の語釈が「ランヲオサメルコト」となっていて、文語と口語、仮

名遣いの違いがある程度である。『漢語字解』作文いろは字引大全の掲出語は語釈とともに『増補布令字弁』から抜粋されていて、純然たる漢語辞書、『増補布令字弁』の縮約版であるということになる。『増補布令字弁』は正編の後に遺漏編が付いているが、『漢語字解』作文いろは字引大全でも、そのまま、『漢語字解補遺』が正編に続いている。前者の掲出語数は六六一二語、後者の語数は五七一六語である。後者における独自の増補はゼロではないが、極めて少ない。

『漢語字解』作文いろは字引大全は元は作文辞書ではない。次に『日用／書翰』作文字引大全について見る。この辞書は、八部を例にとると、冒頭は「拜啓・拝白・拝見・拝誦・拝読・(三〇語省略)・半年・半月・半日・半身・半熟・母・母様・母上・母親・発兌・発行・発熱・発生」である。語釈はすべての掲出語に付いている。なかには俗語であるとの注記もある。漢語の数は八部の場合、四二七語のうち三三三語であり、全体の約七六パーセントを漢語が占めていて漢語辞書と言える。しかし、和語・混種語もあるから国語辞書に近い。掲出語は漢語・和語に限らず意味分野から言えば、人事・時候に関する語が多い。また、「清・拝・芳・拙・陋」などを頭字にした敬語も多数ある。したがって、本書が作文辞書であり、角書きにあるように書簡執筆用の辞書として編集されていることは確かである。しかし、凡例に次のように記されているから近世の節用集のように単なる用字を知る、あるいは確認するためにのみ使用される辞書として編集されたのではなかった。

一余等カ本書ヲ公ニセントスルノ趣旨タル生徒等ガ綴文上用語ノ意味ニ暗ラク或ハ全ク其知識ノ缺乏ヨリ志想ヲ写スニ苦シミ為メニ質問ト説明ノ繁雜ナル徒ラニ時間ト苦力トヲ消費スル蓋シ少シトセス故ニ生徒ヲシテ此書ニ拠リ自カラ助ケシメ以ツテ授業上ヨリ無益ノ繁雜ヲ驅リ生徒ノ苦ト教師ノ煩ヲ救ハントスルニ在リ
 一本書ハ主トシ小学校生徒ノ為メニスト雖いろはノ部類ニ依テ日用文ニ必要ナル語ヲ広ク輯集シ読方及ヒ其略解ヲ附シタルヲ以ツテ普ク作文ヲ練習セント欲スルモノ、為メニモ益アルコトヲ期ス

本辞書は用語の理解力を深め、語彙の運用力を高めることをも目的として編集されている。そのことの自覚は次の辞書の凡例に一層、明確に現れている。

『明治／実用』作文字典は「熟語索引」と名付けられた本体部と、「同訓字解」の頭書からなる。本体辞書の掲出語はすべて二字漢語であり、配列はイロハ順である。

一見 いつけん 一目見ること一寸見ることをいふ一見してその真偽を知るなど
 いふに用ゆ

一笑 いつせう 何か物など人に贈り御一笑被下度などに用一寸御笑迄に
 差上るなどいふ意なり

依頼 いらい 頼む事又たよることなり

優等いとうとう まさりし段等だんとうのことにて優等賞いとうとうしょうなどいふ他にすぐれまさりしこ

とをいふ

引力いんりよく ひく力ちからといふことにて物理学上ぶつりがくじやうの語ことばなり

語釈は比較的詳しく、用法を示し、使用例を付すこともあり、当時の辞書としては出色の辞書である。この辞書は漢語辞書と呼んで差し支えない。編者もそのように考えていて凡例で次のように述べている。

本書は日用往来文を綴るを主要として編纂したるものなり然れども編者の期する所は博く何文を綴るにも便ならしめんことを望めり故にその記す所記事論説にも適用すべきものあり

(中略)

本書は用字を求むるに便なるのみならずその意義を知るに便なるべく又用ゆる個所の例を示すとへば一向いっこうとある下に一向存じ不申などに用ゆと記したり

編者はこの辞書を、まず日常の往来文、そして記事論説を書くために役立つことを主目的として編集している。しかし、近世の、あるいは明治一般の節用集のように熟語・熟字だけを掲げているのではない。すべての掲出語に語釈を付け、漢語の意味を調べることができるように編集している。そこが表記字典としての節用集と、明治になって生

近代漢語辞書の基準

まれた作文辞書との大きな、そして重要な相違である。なぜこのような違いが生じたかは、作文辞書の掲出語が全部、あるいは多くが漢語であることから推測できる。明治二年に出版された『漢語字類』の序例に、

方今奎運盛ニ開ケ文化日ニ新タナリ上ミハ朝廷ノ制令方伯ノ
啓奏ヨリ下モ市井閭閻ノ言談論議ニ至ルマテ皆多ク雜ユルニ漢語
ヲ以テス而シテ童蒙ノ士之ヲ目シテ読ム能ハス之ヲ耳シテ解ク
能ハス甚シキハ口ニ説テ心ニ知ラサル者アリ

と記されてから、この作文辞書が編集された明治二十八年までに既に二六年が経っているが、法令関係に限らず一般に生硬な漢語が続いて多用されていた。したがって、漢語を「耳シテ解ク能ハス甚シキハ口ニ説テ心ニ知ラサル者」も多く、その人たちが文章に漢語を用いるとすれば、同音異義の漢語を分別して熟字を確認する必要がある、また意味を確かめる必要もあつた。類義語との違いなどを含めて用法を正確にしなければならぬ。そのためには語釈が必須であつた。書かれたに語釈を必要とすることがあつたのである。節用集で同訓異字の書き分けを確認することだけでは充分ではなく、漢語の多用に伴って漢語の意味・用法についての情報が要求されるようになっていた。作文辞書はそのために編集された。現代人が文章を書くときに、表記字典の外に国語辞書を利用することがあるようなものである。

明治期には、現在、国語辞書と呼ばれているような辞書が少なかつ

たから、作文辞書が編集されたのであるが、それを漢語辞書、国語辞書としても使用することが可能であった。『作文新辞典』の凡例に、

本篇は、作文新辞典と命名したれども、其の内容は、一種の読書辞典として、また尤も恰当なるものなり、されば文を作るに当り、其の詞藻を練り、優美剴切なる用語を択むの資として、実に重宝なるのみならず、文を誦み書を読むに当りて、難を解き疑を質すの料に供じて、蓋し亦た得る所多大なるべきを信ず

と記されているのは作文辞書の性格をはっきりと示している。このように作文辞書と読書辞書とは内容の上で重複し、漢語辞書と節用集ほどには隔たりがなかったから、作文辞書を漢語辞書に改題し、また逆に漢語辞書を作文辞書として出版することがあった。山田氏が附表に作文辞書を掲げておられるのは、理由は記されていないけれども、そのようなことであろう。また「大系」に作文辞書が収録されているのも、「一覽」にその多くを掲出したのも、このように考えたうえのことである。これらの辞書は、読解辞書としての使用に耐えるから、漢語辞書として扱うことが許されてよい。ただ問題は、作文辞書を漢語辞書に包摂すると、当然のことながら、漢語辞書と違う種類の漢語が掲載されている辞書を同類の辞書とみなすことになり、必ずしも生硬とは言えない書状用の漢語、そして和語が、本来の漢語辞書の漢語と混合する結果になることは承知しておく必要があるであろう。

(五)

丁の「漢語辞書が同一であることを判定する基準」は問題がないようである。実にはむつかしい問題をはらんでいる。初版本（初刻本）と改題本、改刻本、改編本との関係、および書名・編者名・刊年などの関係が係わる区分である。このほか、異本であるか否かの判定には書誌的には見返し、題簽（外題）、尾題・柱題、出版人、販売所、広告の有無、紙型、紙の厚薄などが問題になるが、後出の附表「近代漢語辞書一覽」では書名と編者名・刊年に基準を限定して区分した（刊年不明の場合は「届」や「刻成・新刻」の年月を採った）。また、合本など、本の形態が違っている場合も異本としてリストに掲げた。

改題本は狭義には書名だけが変えられている本を指すのであるが、「近代漢語辞書一覽」では、同時に編者名や刊年など、辞書本体に係わらない部分の変更がある辞書を含めて、改題本とする。また、改刻本は底本どおりに彫られていることが前提であるが、時には掲出語の増減、掲出語に付された漢字音の改変、語釈の変更を伴うことがある。このような改編本も、「一覽」では改刻本として扱っている。おおまかな判定基準を設定している。細かな基準による調査が可能になるのは、異本のすべて、あるいは大部分が出揃ったと判断されたときであり、同時にそれらを手取る機会に恵まれた場合であって、今後のことである。

改刻本でもっとも複雑なのは『増補新令字解』（東条永胤増補、明治三年刊。一覽032）である。^{注15}この場合は、改刻本は同時に改編本と

いつてよく、奥付は同じであるにもかかわらず、辞書部分が大幅に改変されている。山田忠雄氏の著書では別種がaからdまで掲載されていて、かつ詳細な比較対照が行われている。そして、各版における改編は、ヘボンが『和英語林集成』の初版から三版にかけて行った改訂に匹敵すると高く評価しておられる。^{注16}しかし「近代漢語辞書一覽」では初版本だけを挙げた。「大系」でも初版本だけを収録している。

『布告／必用』漢語絵字引（一覽107）にも改刻本がある。掲出語を取り替えたり、語釈を変え、それに伴って図柄を改めたりしているから改刻・改編本ということになる。^{注17}ところが、書名は同一であり、編者・刊年も同じであるので、「近代漢語辞書一覽」では初刻本のみを挙げた。「大系」でも初版本を収録するに止めてある。異本を徹底的に調査して掲出本を確定するとすれば、山田忠雄氏のような方法で長期に、精力的に収集・精査する必要があり、誰にでもできる仕事ではないからである。

改刻本のなかには、初刻本と年月を隔てて刊行され、そして内容が変えられているものがある。明治五年に出版された『布令／必携』新聞字引』は明治八年に改刻され、そのときに掲出語が増補された。それと同時に掲出語の漢字音や、語釈が多く改変された。^{注18}増補改訂」と名付けられてもよいような改刻本になっている。「一覽」では刊行年が違うからそれぞれを掲出してあるが、「大系」では初刻本を収録するのみである。これらの基準による整理は今後の課題である。

『漢語二重引』には初版（一覽050）と再版（一覽091）とがある。再版本では語釈を改訂し、掲出語を増補し、また入れ替えている。その

ために掲出語の配列が全面的にずれているから、再版本は改刻本であり、改編本であるということになる。再版ということばだけでは、元のままの改刻本であるのか、改編本であるのか、違いが判然としない。『漢語二重引』の再版本は初版本と刊年が違うから「近代漢語辞書一覽」には掲げてある。だが、「大系」では再版本を収録していない。改題本・改刻本・改編本は、初版本との異同に種々の程度があり、選択に揺れが生じるので「大系」では初版本だけを収録することを原則としているからである。しかし、この基準は揺らいだ。『布令／必携』新聞字引（一覽046）を六二卷（補遺編一）に収録したのは、その現れである。最初はこの辞書を『布令／必用』新撰字引』の改題改刻本と位置づけた。増補語は四語で、語釈の改変も少ないからである。しかし、最終的には書名と刊年が違うことを重視して補遺編一に収録することにした。内容を重視するならば、『増補新令字解』（東条増補）の諸本や『漢語絵字引』の異本のほうが改変が多い。また『布令／必携』新聞字引』や『漢語二重引』の再版のほうの変動が大きい。これらを別本としなかったのは書名が同じであり、「増補」「改訂」「校正」といった文字がなかったからである。機械的に過ぎた処置であった。再考の余地がある。

明治期の漢語辞書に改題本、あるいは改刻本・改編本が多いことは上述のごとくであり、前節でも見たとおりである。『増補新令字解』『布令／必携』新聞字引』『布告／必用』漢語絵字引』の改編本は山田忠雄氏が早く『近代国語辞書の歩み』で指摘しておられるのであるが、氏は同書で次の改題本についても紹介しておられる。

『音画／両引』漢文字引（福寿信、明治十一年二月刊。一覽142）は『音画／両引』開化節用集（福寿信、明治九年四月刊。一覽096）の改題本^{注19}。

『漢語大字典』（大塚子成、明治三十五年七月刊。一覽283）は『必携熟字集』（村上快誠、明治十二年五月刊。一覽163）の改題本^{注20}。

『漢／語』開化節用字集（宇喜多小十郎、明治八年十二月刊。

一覽077）は『新撰字類』（松屋貫一、明治三年七月刊。一覽028）の改編本^{注21}。

『掌中／類聚』漢語集（桜春雄、明治八年六月。一覽069）は『漢語類苑大成』（大埤学人、明治六年七月刊。一覽051）の改編本^{注22}。

このうち、『開化節用字集』と『新撰字類』との関係については訂正を要する。山田氏は「65は17を基とし見出し語を増補したものである^{注23}」と記しておられる。65は山田氏が『開化節用字集』に与えられた番号であり、17は『新撰字類』の番号であるから、『開化節用字集』が『新撰字類』を承けて成立していると言っておられるのである。土屋信一氏は『開化節用字集』の解説でこれを紹介されて「掲出語につ

いては、12『新撰字類』を基として見出し語を増補したものであろうとする山田忠雄の研究がある」と記された（この場合の12は「大系」の番号で『新撰字類』を指す）。しかし、『開化節用字集』を『新撰字類』と結びつけるのは唐突である。両書の関係を山田氏は『新撰字解』についての解説文中で記しておられるからである。この二つの漢語辞書は成立経過からいって掲出語が多く重なるのは当然であるが、掲出語の配列がまったく異なるから、『開化節用字集』は『新撰字類』を承けて成っているのではなく、『新撰字解』を継承して成立している^{注24}とすべきである。山田氏は『新撰字解』の解説の直前に『新撰字類』について書いておられ、書名が類似しているために、また、番号が使われたために混乱が起ってしまったのであろう。誤植に近い誤りであるが、一度起こってしまうと後のちまで響き、目次においても『漢語／開化節用字集』の母胎としての『新撰字類』とある。

山田氏に続いて土屋信一氏は「大系」の解説、および解題補遺で以下の改題本・改編本を紹介しておられる。

『漢語両通』新選いろは字引大全（山川良峰、明治十四年四月。一覽178）は『漢語字解』（池田観、明治七年一月。一覽052）の改題本

『伊呂／波分』漢語字引（川口宗昌、明治十四年九月。一覽183）は『いろ／は分』布告新聞字引（安倍為任。明治十一年六月届。一覽152）の改題本。

『新選／普通』漢語字引大全（福井淳、明治十七年八月刊。一覽200）は『改正／増補』画引漢語字典（広沢信房、明治十年四月刊。一覽130）の改題本。

『新撰漢語早引大全』（武田福蔵、明治十七年十月。一覽201）は『新撰以呂波節用』（武田福蔵、明治十二年六月刊。一覽166）の改題本。なお、合本『開化早字引大成』（明治十五年九月刊）にも収録されている。

『広益漢語字解』（藤田善平、明治十八年二月刊。一覽203）は『漢語伊／呂波分』大全数字引（藤田善平、明治十二年八月刊。一覽167）の改題本。

『明治新選』いろは漢語字典（安田与三郎、明治二十年十月刊。一覽212）は『懷中漢語字引大全』（大館利一、明治十四年七月刊。一覽180）の改題本。

『新撰漢語字引』（中島久徴、明治二十一年十一月。一覽220）は『開化新選字引』（西野古海、明治八年十月。一覽072）の改題本。

『熟字以／呂波引』漢語大字典（荒川義泰、明治二十五年十一月

近代漢語辞書の基準

月。一覽239）は『漢語いろは字典』（只木小五郎、二十年十月刊。一覽213）の改題本。なお、本書は合本『新撰／活用』五書大字典（明治二十七年三月刊）にも収録されている。

『民家／手引』布令字引（編者不明、慶応四年刊。一覽010）は『布令字弁』一編初刻本（知足、慶応四年十一月。一覽007）のイ部に若干手を入れたもの。

『漢語和解一覽』（編者不明、明治十年三月刊。一覽127）は『漢語和解一覽』（藤野貞造、明治九年二月刊。一覽084）の『版木に手を加えたものか』とする。

以上のほか、次のような改題本・改刻本がある。前節までに紹介した辞書も、重複するが、併せて列挙することにする。

『雅俗節用』（村田徹典、明治九年八月刊。一覽111）は『漢和作文字類』（村田徹典、明治九年八月刊。一覽110）の改題本。

『明治／新撰』漢語字類大全（荒川藤兵衛、明治二十五年八月刊。一覽237）は『開化字引大全』（巻菱潭、明治八年七月刊。一覽070）の改題本

『改正』漢語便覧（石川敬義、明治十年三月刊。一覽126）は

『漢語統貂』（梅岳隠士、明治六年三月序。一覽048）の改題本。

『漢語字引集』（谷壮太郎、明治十四年十一月。一覽185）は『漢語日用弁』（宮本興晃、明治十年十月刊。一覽137）の改題本。

『朝鮮／事件』新聞字引（佐藤三次郎、明治十五年八月刊。一覽192）は『新聞征討戦争字引』（高崎脩助、明治十年五月刊。一覽129）の改題本。

『万民／宝典』漢語作文字引大全（梅之家薫、明治二十六年八月。一覽248）は『改正増補』漢語新画引大全（片岡賢三、明治二十年七月刊。一覽211）の改刻・改題本。

以上は改題本を中心に挙げ、改刻本は、原本と辞書本体がほとんど変わらないものに限った。山田氏が指摘され、土屋氏が挙げられたものに、私が落ち穂拾いしたものを加えると、三〇点に近い。もし改刻本で、改変の程度がやや大きい辞書をも対象にするならば、次のものが加わる。

『開化掌中早引』（星唯清、明治十一年四月。一覽145）は『雅俗節用』（村田徽典、明治九年八月刊。一覽111）の改題本。

『大全漢語便解』（浜真砂、明治九年七月免。一覽108）は『広

益』熟字解画引部』（湯浅忠良、明治七年八月刊。一覽057）の改刻・改編本。

『布令新聞／新撰校正』普通漢語字引大全（平田繁、明治八年十二月刊。一覽080）は『広益』熟字典画引部』（湯浅忠良、明治七年八月刊。一覽057）の改刻本。

『漢語／字解』作文いろは字引大全（近藤延之、明治二十八年一月。一覽259）は『増補布令字弁』（知足、明治五年冬再。一覽047）の改刻本。

『開化掌中早引』と『漢和作文字類』『雅俗節用』との関係は、後の二書が同版であるので確定しにくい。『漢和作文字類』の「漢和作文字類索引」が『雅俗節用』では「索引表」になっており、『開化掌中早引』では「索引」であるから、『開化掌中早引』は直接には『雅俗節用』を承けていると考えてよいであろう。『開化掌中早引』では序文や凡例を改め、また既述のごとく附録として用文章を掲載している（八九丁オから九八丁オまで）。また、『雅俗節用』では八九丁ウの「不レ得二寸暇」で終わり、その下に「止」、次に奥付が配されているのを、『開化掌中早引』では、その「止」以下を削除し、「雀躍」から「水天髻」の六語を増補している。そして奥付は附録の後に記している。このように、『開化掌中早引』には、僅かではあるが増補語があり、また辞書部分以外の改編・増補もあるので、単純に改題本と

は呼びにくいところがある。

『大全漢語便解』と『広益』熟字解画引部』とは、組織はともに一二行二段である。しかし、以下の点が異なる。掲出語の頭字が同じ場合、後者ではいちいち頭字が繰り返して書かれ、前者では「、」で示される。掲出語は主として最終丁に集中的に前者に増補があり、他の丁ではまとまった掲出語の無い。空欄を利用した増補がある程度である。『布令新聞／新撰校正』普通漢語字引大全』と『広益』熟字典画引部』では、掲出語の配列は冒頭の「一」部以外では変動がないが、組織は前者が一八行二段、後者が一二行行二段である。ただし、掲出語は同数である。『漢語字解』作文いろは字引大全』と『増補布令字弁』では、組織がまったく違う。前者は八行五段の活字本であり、後者は一二行二段の木版本である。掲出語数も前者は九〇〇語ほど少ない。このように辞書部分に大きな相違のある辞書を挙げるならば、その数はさらに増え、その結果、かつて私が明治元年から明治六年までの漢語辞書について示したような漢語辞書の系譜を描くことになるであろう。^{注25} それでは漢語辞書の展開を対象にすることになり、漢語辞書の基準の問題とは異なる事柄になる。

(六)

最後に、漢語辞書を、玉篇・節用集から区分する基準にもう一度、立ち戻って、漢語辞書が、玉篇・節用集とどのように係わっているかについて見ておきたい。

まず最初に漢語辞書と節用集の区分についての問題を取り上げる。

近代漢語辞書の基準

漢語辞書と節用集とは、前者が読解辞書であり、後者は純粹の表記字典であつて、したがって前者には掲出語のすべてに語釈が付いているのに対して、後者には伝統的に語釈が付いていないことが最大の相違である。ところが、明治期になると、『掌／中』早字引集』の他にも、全体としては節用集の形態でありながら漢語に語釈を付けることのある辞書が次々出てくる。

『画引／いろは引』新撰両通字引』 浮田小十郎編、明治九年十二月刊（一覽118）

『布告新聞』要語字引』 松本平吉編 明治十年十月刊（一覽138）

『開化新增』大全早引節用集』 丹羽駒吉編、明治十三年一月刊（一覽171）

『書用部分字引』 山本幸吉編、明治十三年十一月刊（一覽174）

『明治節用集』 松川半山編、明治十四年二月刊（一覽177）

『部分諸用早引』 県政吉編、明治十四年八月刊（一覽182）

『広益／雅俗』明治節用字典』 小笠原美治編、明治十五年二

月刊（一覽187）

『いろは数引集』 藤谷暢吾編、明治二十三年六月刊（一覽224）

『雅俗／節用』いろは新字典』 和久光徳編、明治二十九年十

二月刊（一覽266）

『帝国以呂波節用大全』 山田美妙編、明治三十一年九月刊（一覽271）

『雅俗広益』いろは節用字典』 的場子礼編、^{注26}明治三十五年二月刊（一覽280）

『新式いろは引節用辞典』 大田才次郎編、^{注27}明治三十八年八月刊（一覽297）

『部分諸用早引』は『書用部分字引』の改刻本であり、また『雅俗広益』いろは節用字典』は「画引／いろは引」新撰両通字引』の改題本である。右に掲げた辞書のうち漢語辞書と関係の深いものが何点かある。

『画引／いろは引』新撰両通字引』は書名が示すように「両通」であるところに特徴がある。「両通」とは「書くこと」と「読むこと」に役立つことである。凡例に次のごとく記されている。

今や文化隆盛の御代にして字書字引数篇流行すといへとも読に便なれば書に便ならずこゝを以初学の弁用全しからず因而此篇は初学の為に書読両用の便に述する所なれば世俗の俚言を厭ず又漢音を以て俗語に通じて訳するもあり

この辞書は書名に「節用」ということが使われていないが、節用集の形態である。配列は、第一次が掲出語の振り仮名の一字目によるイロハ順、第二次が意味による十門別である。編集の目的は、一つは「御布告の漢語其余の文字を讀得可き」ためであり、もう一つは「作文信書を書得可き」用字を搜索するためである。書名の角書きの「画引」は索引で漢字を探してその漢字に付いている音によって掲出語を求め、そして、意味を知る方法であり、「いろは引」は仮名で掲出語を探して表記、あるいは意味を知る手段である。ただし、語釈は和語に対しては付いておらず、時おり施してあつても、たとえば、「いさきよし」の振り仮名を持つ四つの漢字に、「清にぎりなきをいふ」、「浄はんのうなきをいふ」、「潔清浄にたいしていふ」、「廉德行をいふ」とあるように同訓異字の選択のために付いているだけである。では漢語に対してはどうかというと、漢語に対しても、この辞書で語釈が付けられるのは十部門のうちの言語門の漢語のみで、しかも、その一部のものに限られる。言語門の構成は、まず和語が配置され、次に漢語が置かれ、さらに漢語と和語の混在部分が続く。三部構成で、漢語は第二部と第三部に記されている。八部を例にとると、第一部の和語は省略し

て、第二部の漢語を、掲出語の左側の振り仮名をその下に移して示すと次のようになる。

頗僻カタツム 頗側同 頗邪ヒガム 破産シンシヤウラツプス
覇府タイシヤウノヤクシヨ 覇業タイシヤウノワザ 霸王之資タイシ
ヤウナルモトデ 佩刀コシノモノ 佩荷オンヲワスレス 拝誦ハイ
シヨム 拝受ハイシウケル 拝承ウケタマワル 拝啓ハイシマウシ
アケル 拝呈ハイシサシアゲル 胚胎コシラヘル 敗北イクサニマ
ケル 敗走同 敗績同 輩出ツ、ヒテテル 廃止ヤメル
廢物スタレモノ 廢弛スタレユルム 廢典スタレテオキテ 背叛
ソムク 稗史クサヅウシ 配祀アハセマツル 排列ナラフナラフ
邦国クニ 邦土同 邦憲クニノオキテ 邦政クニノセイジ 邦
令クニノオフレ 放縱オモヒマ、(以下省略)

これらは十四丁裏から十五丁表にかけて記されているが、十七丁裏の第三部になると、「白状シロシカタチ、媒介ナカタチタスクル、敗軍ヤブルイクサ、廢壊スタルヤフル」のように、語釈ではなく字訓が記されるだけになる。また、同じ漢字を頭にもつ漢語が続くと、「廢壊」に続く「廢学」「廢忘」には「学」「忘」にのみ字訓が付けられる。「拔萃ヌクムラガル」の次の「拔萃」には「萃」に「アツマル」とだけ字訓が記される。言語門の、「白状」以後はすべて同じである。これは節用集の伝統的な形態である。節用集として異例なのは第二部の「頗僻」以下、「白状」の直前の「循レ法キマリトホリ」までである。この部分の掲

出語の配列は一定の基準がないように見える。「方向ミノフリムキ」、「放置オシコメオク」、「跋扈アバケル」など『漢語字類』に見られる特異な語釈や俗語が記されているけれども、頭字が『漢語字類』のように部首順ではない。しかし、一七八語の全体を眺めると無秩序でないことが見て取れる。右に掲げた漢語の冒頭部は「頗僻」を初めとして、頭字の振り仮名が「は」であるものが集まっている。次は「佩刀」のように振り仮名が「はい」で始まる漢語、その次は振り仮名が「はう」である「邦国」が続く。さらに頭字の振り仮名が「はく」、「はん」「はつ」の漢語が類集され、この後に頭字の振り仮名が濁音である「ばい・ばう・ばく・ばつ・ばん・ば」の漢語が掲出されている。そして最後は返読語の「雪レ耻・裂レ膚・循レ法」で終わる。第二部の漢語は八部以外であっても、ほぼこの形式で配列されている。ところが、掲出語をこれと同様に配列する漢語辞書がある。『漢語便覧』(明治三年序。一覽^{注26}031)がそうである。はたして『漢語便覧』の八部は「頗僻」から始まり、「循レ法」で終わる。『漢語便覧』と『画引／いろは引』新撰両通字引の間には八部について見ると、後者に「抱関撃柝・藩収・藩屏・馬車」の四語が抜けているだけである。仮名遣い、清濁表記など若干の相違があるが、語釈もほとんどが同じである。これはイ部からス部まで変わらない。『画引／いろは引』新撰両通字引の「両通」の一方は「画引」であるが、この手段である「画引標目」も実は『漢語便覧』の索引をほとんどそのまま継承している。『画引／いろは引』新撰両通字引の読解機能を担う部分、そして、同時に漢語の理解力を高め、漢語の運用力を増すための部分は漢語辞

書によって成り立っているのである。漢語辞書の節用集への関与は『掌／中』早字引集』で終わっているのではなかった。したがって、『画引／いろは引』新撰両通字引』も、『掌／中』早字引集』と同様に「大系」に収録される資格を有している。しかし、漢語辞書部分は門数でいえば十分の一であり、さらに言語門の一部分であって、表記字典部分に対して分量が少ないので「大系」には収録していない。

『布告新聞』要語字引』は、この書名にもかかわらず全体は節用集の形態である。組織は、まず振り仮名の最初の仮名のイロハ順、次に言語門・時候門・乾坤門など十門順である。凡例に、

維新以来文運日月二隆盛シ公布ヨリ新聞紙ニ至リ往々漢語ヲ挿ミ
閭閻ノ小人或ハ其義ヲ了解スヘカラサルアリ因テ此編ヲ作為シ専
ラ熟語熟字ヲ蒐集シ部類ヲ分チ傍ラ其義ヲ注シ布告新聞要語字引
ト曰フ

と記されているが、和語の掲出語に対しては漢字音をその左に書き、掲出語が漢語ならばその左に字訓を示すのが通常である。また、熟語・熟字ばかりが掲出されているのではない。八部を例にとると、時候門には「春」があり、器財門には「柱・箱・針」、その他の門には「齒・膚・裸・袴・花・蓮・菽・鳩・隼・蜂」などが掲げられている。言語門も「励」から始まり、「遙・省・端・憚・弾」と、熟語・熟字でない掲出語が続く。これらにも語釈がなく、それぞれの字音が記されているに過ぎない。時には、「吐口より」「掃ちりを」「履足に」のよ

うに同訓異字の書き分けについての指示があるのみである。語釈が記されるのは言語門の、それも初めから三一語目の「破産」からの四六語だけである。僅かな語数の部分が凡例で言う内容に該当する。ところが、この個所は漢語辞書を承けていることが「方向」の語釈を「ミノフリムキ」とし、「跋扈」に「アバケル」と記していることから窺える。「方面」の語釈を「イツハウ」としているから『漢語字類』の「イツパウノタイシヤウ」を改めた辞書を継承しているのである。漢語辞書からの引用は僅かな語数である。しかし、この継承があつて初めて「布告新聞」の角書きを置き、書名を「要語字引」とすることができた。また右の凡例を書くことが可能になっている。量の問題ではない。それほどに漢語辞書部は重要なのである。

『広益／雅俗』明治節用字典』は、組織が早引と意味分類とを併せた式の節用集である。掲出語を、先ず振り仮名の第一字目によるイロハ順に分け、次に振り仮名数順、それから言語・天地・人倫・支体など意味による配列になっている。掲出語は楷書と行書の二体、天地以下の部門では語釈はなく、和語に対してはその漢字の音を、漢語に対してはその漢字の訓を記すに過ぎないことは通常の節用集と同じである。しかし、本書はいろいろな特色をもっている。そのうち、緒言に「熟語の事」「本書熟語の功用」と記されている二項を次に記す。

方今奎運に際し日用彼我贈答文は勿論其他多く漢語を用ゆ蓋し之れ江湖風潮の然らしむる所にして学識ある人士の敢て之に病まずと雖ども未だ充分学窓に対せざるの人。若し他人より蔭休を以て

云々とある尺牘若くは布告布達中何々を鹵掠され候趣とあるに當て蔭休と鹵掠の字義を解せずんば果して如何五里霧中に逍遙するなるべし此時此書に就て「イの四」(一言)中を索らば蔭休左方にオカゲと訳し「口の四」(一言)中鹵掠左方ウバヒトルと訳す其字義一目に瞭然として火を観るが如く何なる難字に遭ふも病まざる可し此れ此書前記の各書に就て博く当唐山の熟語を涉獵し之に訳を施したる所以なり(以下略)。

目下法律学及び唐山の俗語(方今布達布告等に多く用ゆる文字)大に行なはる而して法律と唐山の俗語所謂小説文字は別に一体を為し經史の語と同じからず(中略)本書確固たる書に就て悉く之を挙げ小説及び法律書を読む人の便に供す

ここに記されているのは、この『明治節用字典』が読解辞書としても使用できるということである。ところが、語釈は言語門にしかない。しかも、すべての語に語釈が付いていてではない。ハ部を例にとると掲出語は次のようである。

- 1、振り仮名が一つの漢語成分「破・派・巴」など二三語(ただし「端」に「は」と振り仮名を付けて、これを字音扱いしているのは誤り)
- 2、振り仮名が二つの漢語成分「敗・判・傍」など六二語、「端・恥・吐」などの一字和語が一一語、「嘔吐・罵詈」などの二字の和語・漢語が五語。

近代漢語辞書の基準

- 3、振り仮名が三つの「佩荷・保護・廢止」など二字漢語が四二語、混種語が「発」一語、「別・外・省」などの一字和語が五二語、「却舍・流行・歩運」などの二字和語が六語。

- 4、振り仮名が四つの「判然・霸業・板蕩」など二字漢語が一七六語、「馳着・腹立・抵抗」などの二字和語が一四語。

- 5、振り仮名が五つの「傍觀・叛逆・方嚮」など二字漢語が二七語、「耻敷・馳向」など二字和語が九語。

- 6、振り仮名が六つから九つまでの「莫逆之交・報国尽忠・傍觀座視」など四字熟語が二三語、「難離・乍憚・馬鹿々々敷」などが九語である。

これらのうち、語釈が施されているのは2・3・4・5・6の内の漢語、約三〇〇語である。『画引／いろは引』新撰両通字引』に比べると語釈が付けられた漢語が多い。そのことが緒言の二項目で述べられているのである。編者は「雅俗／広益」明治節用字典引用書目』で『福惠全書』『明律』『韻府一隅』『徒杠字彙』『南山俗語考』『小説字彙』など二三種の出典を挙げている。ところが、『広益／雅俗』明治節用字典』に掲出されている漢語の多くは先行の漢語辞書に見られるから引用書目から採集されることは少なかつたと推定される。『広益／雅俗』明治節用字典』の「方物・方鎮・方面・方今」は『漢語字類』に、語釈は違うがすべて掲出されている。また、「薄命・薄倖・薄材・薄物・薄録・薄俸・薄祐」のうち「薄命・薄倖・薄材・薄物・薄俸」も語釈に違いは見られるが、『漢語字類』に掲出されている。

『広益／雅俗』明治節用字典』の「反唇・反舌・反眼・反殺・反応・反省・反対・反縛・反問・反覆・反心」は『大全漢語解』（一覽037）に「反心」以外はすべて掲載されている。「反唇」から「反応」までは配列も同じである。『必携熟字集』（一覽163）には以上の「方」「薄」「反」を頭字にもつ漢語が「方鎮」以外はすべて掲載されている。『広益／雅俗』明治節用字典』では、「配」「抜」「方」「放」を頭字にする漢語が二か所に分かれて記されている。これは種々の漢語辞書から掲出語が収集されて、整理が行き届いていないことの現れであろう。八部の一七六語のうち『必携熟字集』に見られないのは「白受・白取」など白話語らしいものを含めた二〇語余りである。

『広益／雅俗』明治節用字典』の編者は緒言で本書が読解辞書であることを強調する。しかし、読解辞書の部分は先行の漢語辞書を基礎にして成り立っているのである。節用集を表記字典としてさらに充実させ、また読解にも役立つ辞書に変化させたのは先行の漢語辞書である。もつとも、漢語辞書部は、作文辞書の凡例に記されていたように漢語の運用力を高めるためにも役だったに違いない。いずれにしても表記字典を多用途辞書にしたのは漢語辞書部である。節用集が国語辞書に近くなり、漢語辞書から独立するのは、右の節用集では『帝国呂波節用大全』『新式いろは引節用辞典』になってからである。

玉篇が明治になって変化したのも自律的な力によってではない。漢語辞書が係わっている。山田忠雄氏が作成された「近代辞書刊年索引」によると、明治になって最初に編集された、編者が判明している玉篇は明治四年春に出版の『日誌／画引』新令字類』（一覽035、歩み

玉205）である。この辞書が紛れもなく玉篇の特徴を持っていることは、単字が大字・太字で掲出され、その右、あるいは右左に漢字音が示されていること、また、単字の下に韻が記され、次に字訓が並べられていることで間違いない。「一」を見ると、単字の右には「イツ」、左に「イチ」、単字の下には「質」を四角で囲むことによつて質韻字であることが示されている。字訓は「ヒトタビ・ヒトツ・ヒトリ・ハジメ・カズ・ヒトヘ・オナジ・カタクナシ・キハマル」である。多数の字訓が記されるのが玉篇の特徴である。韻の表示がなくなり、字音と字訓の数が減ると、玉篇の本質をそれだけ失うことになる。

『日誌／画引』新令字類』は玉篇の特徴を備えている。しかし、掲出字の下は前と後の二部から成つていて、前部分は本来の玉篇であるが、後部分には純粹の玉篇には見られない記載がある。例として掲出字の「一」を見ると、単字の右と左に「ジ・ニ」のごとく漢音と呉音が記され、単字の下に「支」が四角で囲まれて韻が示されている。さらにその下に字訓が「フタツ・フタタビ・フタゴコロ」とある。その下に、「二毛」が、そして、その左に「シラガマジリ」と、意味が記されている。以上が近世の玉篇の形態を残している前部分である。ここを境界に横線が引かれ、後部分になり、そこに「一毛シラガマジリ」「一君フタリノシユクン」とある。ここで不思議なことが起こっていることが分かる。前半にも後半にも「二毛」が掲げられているのである。前半のものは、この辞書が底本とした玉篇、『音韻授幼文選字引』（享保十九年原刻）に「二」の例として記されている「二毛」である。玉篇に記されているために、玉篇に相応しく漢音形ジバウが

記されている。一方、後半の「二毛」は明治になってこの『日誌／画引』新令字類』が刊行される時に内容の充実をめざして増補された漢語である。「二毛」と「二君」が増補されたのであるが、その時にどちらかと言えば漢字音としては一般的な呉音形で掲出された。「毛」の振り仮名が「マウ」であり、呉音形であるから「二」の字音も呉音であると推定される。当時は「二毛」「二君」に二種類の漢字音が使用された。東条永胤が増補した『増補新令字解』の二部に、

二毛^{ジマウ} シラガマジリ
 二君^{ジクン} フタリノシユジン

とある。二部に掲出されているのであるから振り仮名は「ニマウ」「ニクン」であるはずであるのに、「ジマウ」「ジクン」になっている。いかにも明治期らしい漢字音の交錯である。「毛」の音は呉音であるが、「二」については改まった文体での字音が想定されて漢音が記されているのである。これと同じような例が『新令字解』にもある。ナ部に「内憂外患^{クワイウクワイカン}」とある。「内」の漢字音として、呉音形が記されるはずのところ漢音形が記されている。それが、『増補新令字解』（東条永胤増補）では「ナイイウクワイカン」と呉音に改められる。『増補新令字解』では、より一般的な漢字音が記されている。「二毛」と「二君」の「二」については『増補新令字解』の字音は漢音形であるが、これが呉音形に改められて、『日誌／画引』新令字類』の後半部分に記されたと推定される。ここに玉篇への漢語辞書の影響が窺える。

近代漢語辞書の基準

次に『日誌／画引』新令字類』の掲出字「商」の後半部分を見ると、次の一二語が挙げられている。

商法	アキナヒノキソク
商賈	デアキナヒ／イアキナヒ
商社	アキンドナカマ
商人	アキフド
商販	アキナフ
商税	アキナヒウンジヤウ
商船	アキナヒフネ
商較	クラベル
商權	シメウリ
商館	アキンドヤ
商量	ミツモル
商權	トリハカラフ

一方、『増補新令字解』（東条永胤増補）に、

商法	アキナヒノキソク
商人	アキフド
商賈	デアキナヒ／イアキナヒ
商販	アキナフ
商社	アキンドナカマ

商税 アキナヒウシヤウ
 商船 アキナヒフネ
 商館 アキンドヤ
 商較 クラベル
 商量 ミツモル
 商権 シメウリ
 商權 トリハカラフ

とある。語釈は全同であり、語順もほぼ同じである。

「解」は『日誌／画引』新令字類』では、

解体 気バリガユルムコト
 解蔽 テキガノヒテヨウジンヲスル
 解散 チラバル
 解レ兵 グンゼイヲヒク
 解レ官 ヤクメヲヒク
 解顔 ニコツク
 解職 同上
 解レ園 セメグチヲヒク
 解頤 アゴヲハズス／タイソウニラカシキコト

とある。これは、『増補新令字解』の語釈と全く同じである。『増補新令字解』の掲出語の順序は「解体・解散・解レ兵・解蔽・解レ官・解

職・解顔・解園・解レ頤」であるから配列に僅かな違いがあるのみである。玉篇であるこの『日誌／画引』新令字類』に、「新令」の名を与え、角書きに「日誌」と書かせたのは、『増補新令字解』であった。『掌中真草字引大成』（明治十年一月刻。一覽120）も紛れもなく玉篇である。漢字音・韻のほか、字訓も多数が記されている。ただ、『日誌／画引』新令字類』と違うのは、『日誌／画引』新令字類』では底本となった玉篇の漢語が継承されていたが、『掌中真草字引大成』ではそのようなことがない。一方、『掌中真草字引大成』では単字が楷書と行書の二体が示されること、字訓のなかに名乗りが含まれていて、それだけ本来の玉篇から離れていることが『日誌／画引』新令字類』と違うところである。このような相違はあるが、漢語が多く列挙されていることでは共通する。「商」の場合を次に見てみる。

商旅 アキビト
 商販 アキナフ
 商賈 アキビト
 商社 アキンドナカマ
 商權 シメウリ
 商議 サウタン
 商較 クラヘル
 商量 ミツモリ
 商法 アキナヒノシカタ

これは先に見た『増補新令字解』と、掲出語も語釈も少し違う。ところが、『大全漢語解』の次の「商」の所とよく似ている。

商較 クラベル
商社 アキンドナカマ
商議 サウタン
商量 ミツモル
商人 アキンド
商賈 (アキンド)
商館 アキンドヤ
商旅 タビアキンド
商法 アキナヒノシカタ
商税 アキナヒノウンジヤウ
商權 シメウリ
商船 アキンドブネ

『掌中真草字引大成』の掲出語は『増補新令字解』より『大全漢語解』に近い。語釈もそうである。ただ、『大全漢語解』には「商販」が掲出されていないところが違う。次に、単字「解」の下に記されている漢語を見ると、『掌中真草字引大成』で次のようになっている。

解顔 ニコツク
解官 ヤクヲヤメル

近代漢語辞書の基準

解給冊 カネワタシチヤウ
解得 ガテンシタ
解褐 ホウコウニデル
解兵 グンセイヲヒク
解由 ワケヲトク
解体 ミライレヌ
解圍 セメグチヲヒク
解悟 サトル
解落 チリク
解散 トラバル
解悶 キバラシ
解職 ヤクメヲヤメル

これも、『増補新令字解』の「解」を頭字にする漢語、および語釈と違う（「解散」の語釈はトケルにチラバルが干渉したものか）。掲出語に出入りがあり、『増補新令字解』には「解給冊・解得・解褐・解由・解悟・解悶」がない。また、「解体」のように語釈が違うこともある。「ミライレヌ」は『漢語字類』系統の語釈を受け継いだものであり、「気バリガユルム」は『新令字解』系統の語釈を継承したものである。それならば、『漢語字類』を『掌中真草字引大成』が承けているかといえば、『漢語字類』の「解」を頭字とする漢語は八語しかなく、「解給冊・解得・解褐・解由・解悟・解悶」の語が記されていない。では、『掌中真草字引大成』における独自の増補かといえば、

そうでもない。『大全漢語解』には次の一一語が記されている。

- 解蔽 テキガノイテヨウジンヤメル
解悶 キバラシ
解褐 ホウコウニデル
解体 ミライレヌ
解散 チラバル
解落 チリく
解兵 グンゼイヲヒク
解圍 セメグチヲヒクコト
解官 ヤクメヲヤメル
解職 上ニ同シ
解顔 ニコくガホ

これらの掲出語は『掌中真草字引大成』のものと、返読語と音読語とを同一と見れば、ほとんどが重なる。ただ、『大全漢語解』の「解蔽」が『掌中真草字引大成』になく、また『大全漢語解』に「解給冊・解得・解由」が欠けている。おそらくこの三語をも掲出する漢語辞書があつて、それを基にして『掌中真草字引大成』の漢語は記載されているのであろう。編者は凡例で、

万民日用ノ俗語及経史尺牘ノ塾語^(マ)ニ至ルマデ音訓其根元ヲ審ニシ且日誌新聞紙ノ如キ塾語ニ於テモ正シキヲ撰ミ各真草ノ二体ヲ

記載スルハ日用ノ便利トナルベキタメナリ

と記している。このことが事実であるとすれば、それは全面的に先行の漢語辞書の恩恵によつて可能になつている。他の、熟語を掲出する玉篇についても多くの場合、同じことが指摘できる。

漢語辞書が旧来の辞書を多様な当代辞書に改変させた。その試行錯誤のなかで、玉篇と節用集に、さらに漢語辞書を併せた体裁の辞書も編集されている。『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集（明治十一年四月刊。一覽157）がそれに該当する。角書きの「訓訳校訂」とは、従来の漢語辞書に比べると語釈を吟味して改めることが多く、また、多義語であれば、それらの意味を記していることを指す。「音画両引」とは、掲出語が振り仮名の第一字目によるイロハ順であることと、冒頭に置かれた「檢字」から漢字の画数によつて掲出語が求められるようになってゐることを指す。音引きは表記字典、読解辞書として利用するときの引きようであり、画引きは主として読解辞書として用いるときの引きようである。辞書本体を見ると、単字が一枠を与えられて大字・太字で掲出され、その右、あるいは左にも字音が記され、その下に字訓が並べられて、その下に掲出字の行書体が示される。「一」を例にとれば、大字で太字の楷書体「一」の右左に「イチ・イツ」の字音、「一」の下に「カズ・ハジメ・ヒトツ・ヒトリ・モツパ」など一六の字訓が並べられ、その下に「一」の行書体があつて、それらが枠で囲まれている。ここまでは玉篇に近い。ただ、韻の表示がないことで玉篇の一つの特徴を失い、一方、掲出字の行書体が記さ

れていることで表記字典の性格を兼備しているが、さらに、表記字典としての用途がめざされている。八部でいえば、「催生薬」「仏耳草」「一頭菊」「剪刀」「一去」「一截」「刷毛」「妖艶」「一体」「標悍兵」「忸怩」「時様」「一風」「一態」「星岡」「戦袍」「掃帚草」「払塵子」「插花筒」のように熟字が、単字に混じって頭字の部首順に、枠に囲まれて配列されている。ただし、語釈はなく、熟字の左側に字音が記されることでは通常の節用集と同じである。その点で本書は表記字典の性格が強い。ところが、掲出単字の下には多数の熟語が掲載される。「方」を例にとれば、次のような一九語が挙げられている（掲出語の右側の振り仮名は省略）。

- 方今タビイマ 方国クニニビ 方向コ、ロノムキ 方円シカクト
- マル 方形シカク 方人ヒトラクラベル 方略テダテラスル 方
- 面イツパウ 方鎮一パウタイシヤウ 方物サンモツ。コクサン 方
- 正キマリヨキ 方角カク 方位ハウガクノサダメ 方寸ムネノウチ
- 方士ヤマアブシノルイ 方技ゲイジュツ 方寸ノ中ムネノウチ 方
- 言トチノコトバ 方嚮一定サキビマデココロラサダメル

右の「方向」の「コ、ロノムキ」は『増補新令字解』（東条永胤増補）系統の語釈を承けている（もとは『新令字解』の語釈である）。また、「方面」の「イツパウ」も同じく『増補新令字解』の語釈「イツパウノタイシヤウ」を改めたものである。（「イツパウノタイシヤウ」は、もとは『漢語字類』の語釈である）。それでは、『訓訳校訂』

近代漢語辞書の基準

／音画両引』明治伊呂波節用集』の「方」を頭字にした掲出語は『増補新令字解』を継承しているかといえは、そうではない。なぜならば、『増補新令字解』では「方」を頭字にした漢語が八語しか掲載されていないからである。「方」を頭字にした漢語をもっと多く掲載し、そして『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』が出版された明治十一年四月に近い時期の漢語辞書との関係が推測される。その辞書を特定する用意は今の私にはない。しかし、それと近い辞書として『初字／必携』大正漢語辞書』（明治九年四月刊。一覽097）を挙げる事ができる。ここには、

- 方人ヒトラクラベルコト 方今タビイマ 方向コ、ロムキ 方円
- マルトシカク 方国クニニビ 方略テダテ 方面イツウノタイシ
- ヤウ 方物コクサンモノ 方正キマリガヨイ 方角トウザイナンボク
- 方位シハウノイチ 方鎮イツパウノダイミヤウ 方言キナカコトバ
- 方策テダテ 方便同上 方術ハカルテダテ 方隅カタスミ
- 方法シカク 方平ヒラタイ 方寸ノ中ムネノウチ 方外ノ事セ
- ケングワイコト 方向一定サキビマデコトガサダメル

の二三語が掲出されており、『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』と重ならないのは「方形・方寸・方士・方技」の四語だけである。これら四語を除いた「方」を頭字に持つ漢語を掲出する辞書があつて、それを継承し、かつ掲出語を増補しているのである。『明治伊呂波節用集』の角書きに「訓訳校訂」と出しているだけあつて語釈は穩当で

ある。『初学／必携』大全漢語辞書の「方向一定」は「方嚮一定」の誤りであろう。

「解」を頭字とする熟語は『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』に二三語が記されている。

解軍イクサヲヒク 解圍セメクヲヒラク 解嚴ヨウジンヲヤメル
 解兵グンセイヲヒク 解隊同ジコト。クミ／＼ヲヤメル 解官ヤクメヲヤメル
 解職同シコト 解顔ワラヒガホスル 解頤ワラヒテアゴヲハメル
 ズスヤウ 解体キノハリガナクナル。フワケスル 解剖キリホドク。フワケスル
 解怒ハラダチヲヤメルコト 解散トケチル 解意コ、ロガトケル
 解衣キモノヲヌグ 解甲ヨロヒヲヌグ 解訳ワケガラヲトク
 解撤コワスコト 解悶キヲハラス 解褐ツトメニデル
 解落チリ／＼ 解放トキハナス 解講コウシヤクヤメルコト 解
 暁トケサトル 解明トキアキラカ 解駕ヤスラカ 解嘲ソシラレシコト
 解由ユライヲトク 解得エトクスル 解了同シコト 解
 勸トキス、メル 解語之花モノヲイフハナ。女ノコト 解部ヤクノ名

「解体」の語釈は『増補新令字解』（東条永胤増補）系の語釈「気バリガユルム」を承け（もとは『新令字解』の語釈「気ノハリガユルムコト」）、これに「フワケスル」を付け加えたものである。「解嚴」の語釈は同じく『増補新令字解』の「テキガノヒテヨウジンヲスル」を改訂したものを継承している（もとは『漢語字類』の「テキガノヒテヨウジンヲヤメル」である）。また、「解頤」の語釈は、『増補新令字

解』が編集されるときに増補された語であるが、この「アゴヲハズス。タイソウニオカシキコト」を承けている。それでは、『初学／必携』大全漢語辞書の「解」を頭字にする漢語はどうかと言えば、

解嚴ヨウジンヲヤメルコト 解悶キバラシ 解軍イクサヲヤメル
 解官ヤクメヲヤメル 解職同上 解隊ヘイタイヲトク 解兵同上
 解圍カコミヲトク 解顔ニコ／＼スル 解体キノハリアヒガナクナル
 解頤ヲカシクテアゴガハツレル 解訳ワケヲトク 解徹フネヲコハス
 解衣キモノヲヌク 解意コ、ロカトケル 解散モノヲチラス 解怒イカリヲヤメル
 解褐ホフコウニデル 解落チリヂリ 解釈トキユルス
 解截トキハケル 解説イヒワケ 解剖トキワカツ 解免ハナチユルス
 解脱ノガル、 解纜デフネ 解艶ウルハシ 解削ケツル
 解緩トキユルム 解罪トビラヲヒラク 解放トキハナス 解履ケツラヌク
 解語之花美人ノコト

のごとく二三語が掲出されていて、そのうち二三語が『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』と重なる。これらの二三語を掲載した、『増補新令字解』系の、そして『初学／必携』大全漢語辞書』に近い漢語辞書を承けて、さらに独自の増補をして『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』は成立している。

『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』の引用書目に当時よく読まれた、また利用された書物が多く列挙されている。

国史略 皇朝史略 日本政記 日本外史 本朝通鑑
 国史鑿要 日本史略 新律綱領 改定律令 日本地理小
 誌 日本地誌略 小学入門 小学読本 名物六帖 新
 撰字鏡 合類節用 雑字類編 幼学新書 事物異名類編
 博覧古言 十八史略 元明史略 韻府一隅 尺牘通
 漢史一斑 地理全志 西国立志篇 西稗雜纂 輿地誌略
 万国史略 万国地誌略 正字通

これらの文献が詳細に調査されて、その漢語が採集されたのではないであろうが、本書での増補語は多い。そのために、相対的に先行の漢語辞書からの継承語の比率は少なくなっている。しかし、玉篇・節用集・漢語辞書の融合型であるこの辞書が従前の漢語辞書の掲出語を中核として編集されていることは確かなことであり、『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』は連綿と続いた漢語辞書の系譜のなかに位置づけられる辞書なのである。

この節で取り上げた、節用集型漢語辞書と玉篇型漢語辞書は「近代漢語辞書一覧」にはすべて掲出している。前者は『掌中』早字引集』と同列の辞書と位置づけることができるからである。後者も同様の扱いである。ともに漢語辞書部を備えていて、漢語辞書としても使え、そのことが辞書としての価値を高めていることが理由である。しかし、「大系」には収録しなかった。節用集・玉篇の、それぞれの旧態部分の量が多いからである。これらに対して、『訓訳校訂／音画両引』明治伊呂波節用集』は三種の辞書が融合した型態の辞書であるとは言い

近代漢語辞書の基準

ながら漢語辞書部が中心であり、従前の漢語辞書に比べると増補漢語が多く、掲出の漢語・熟字の総量が『新撰歴史字典』『新編漢語辞林』『熟語大辞林』に次ぐ辞書であるので「大系」に掲載した。「大系」への収録のしかたは様々である。便宜的な面もあり、基準どおりでないところもある。附表「近代漢語辞書一覧」はそれゆえの不足を補うためのものである。

漢語辞書は、近代になって現れた新しい出版物との係わりで誕生し、次いで漢籍とも関係しながら、漢語と読者との間に位置して、特有の機能を果たした。一方、旧来の玉篇と節用集にも、新時代に相応しい機能が期待されたが、それへの対応は多くの場合、漢語辞書の下で行われた。欧米列強に対応すべく翻訳された西洋兵学書の出現に伴って編集された漢語辞書に端を発し、その後、続々と出版された漢語辞書の影響を受けて、その掲出語を取り入れることによって内容を充実させ、多様化させて、当代化が図られた。玉篇・節用集の近代化は主として漢語辞書によって進められたのである。漢語辞書と玉篇・節用集を区分する基準が不分明であったのは、玉篇や節用集の漢語辞書化が進んでいたためであると言ってもよい。

注

注1 松井栄一氏・土屋信一氏と共同監修・編集。第一期（一巻から二

○卷四二点）平成七年十月刊、第二期（二一巻から四二巻五七点）平成八年三月刊、第三期（四三巻から六二巻二七点）平成八年十月刊、第四期（別巻一から別巻三）平成八年三月刊。大空社。

注2 『国語学』39、昭和三十四年十二月。

拙著『近代漢語辞書の成立と展開』（平成二年十一月、笠間書房刊）の第二章「翻訳語辞書の世界」。

注3 拙著『近代漢語辞書の成立と展開』の第四章二節「漢語辞書と漢語都々逸」。

注4 『近代漢語辞書の成立と展開』の第四章二節「漢語辞書と漢語都々逸」。

注5 山田忠雄『近代国語辞書の歩み』三五九・四五七ページ。拙稿「明治期漢語辞書の諸相」（平成八年三月刊『明治期漢語辞書大系』別巻三所収）。

注6 『近代国語辞書の歩み』三三〇ページ・三三一ページ。

注7 『近代国語辞書の歩み』三三〇ページ。

注8 『近代漢語辞書成立と展開』一二五ページから一三二ページ。

注9 『近代国語辞書の歩み』一七二四ページ・一七二五ページ。

注10 『近代漢語辞書の成立と展開』二三八ページから二四三ページ。

注11 『近代漢語辞書の成立と展開』二五ページから四六ページ。

注12 『近代漢語辞書の成立と展開』二五ページから四六ページ。

注13 土屋信一「漢語流行の側面——明治初期女子用往来物を資料にして——」（『国語学』研究）五）三二七ページから三四三ページ。

土屋氏は「漢語字解」（一覽99）の掲出語で『増補新令字解』の掲出語・語釈と一致するものが五〇パーセント、掲出語はあつて語釈の一致しないものが約四二パーセントあり、掲出語が『増補新令字解』に見られないものが約八パーセントであると言われる。ところが、「漢語字解」の掲出語で『増補新令字解』に見られない漢語が『新撰字解』に見られることが多い。イ・ロ・ハ・ニ・ホ・シ・ヒ・モ・セ・ス部についてみると、「漢語字解」に掲出されている「遺恨・柔弱・矛盾・凡庸・幫間・木彊・戦闘・精忠・絶世・切断・水源・吹嘘」が『新撰字解』に見られる（「幫

間」の振り仮名は「漢語字解」ではホウカン、『新撰字解』ではホウケンであつて異なる。「凡庸・幫間・木彊」はホ部の最後尾にかたまつて記されている。また、この範囲で、明確な相違が見られる語釈を「漢語字解」「新撰字解」「増補新令字解」の順に並べると次のようであり、「漢語字解」と『新撰字解』の語釈は近い。上国ヨキクニ・ヨキクニ・チウゴクスヂ（『増補新令字解』のA・B・

C本の語釈はともに同じ。以下でも同様）

折獄ツミラサバク・ツミラサバク・クヂラサバク
選士エラマレタルサムラヒ・エラマレタルサムラヒ・ニンセンサレタルサムライ
善導ヨキミチビキイレル・ヨキミチビキイレル・ヨキミチビキニヒキイレル

注14 『有益／活用』新選独学全書に収載されている『漢語作文字引大全』については「大系」の解説および解説補訂を参照。

注15 『歩み』二七九ページから四〇四ページ。

注16 『近代国語辞書の歩み』。

注17 『近代国語辞書の歩み』四一一ページ。なお浅野敏彦氏に「布告必用漢語画字引」の漢語（『文学・語学』14号、昭和六十二年六月）がある。

注18 『近代国語辞書の歩み』三七五ページから三七八ページ。

注19 『近代国語辞書の歩み』三五五ページ・三五六ページ。

注20 『近代国語辞書の歩み』一七一ページ。

注21 『近代国語辞書の歩み』三五八ページ。

注22 『近代国語辞書の歩み』三七四ページ。

注23 『近代国語辞書の歩み』上巻三五八ページ。

注24 『近代漢語辞書の成立と展開』の第三章「漢語辞書の系譜」。

注25 『近代漢語辞書の成立と展開』一七九ページから二八二ページ。

注26 奥付には「編輯兼発行者 吉岡平助」とある。

注27 内題の下には「大月桂月・久保天随・大田淳軒」の三人の名が記されているが、奥付では編輯者は大田才次郎のみである。

注28 『近代漢語辞書の成立と展開』一八二ページ・一八三ページ。

附表：近代漢語辞書一覧

- 1、この一覧表は、本編で述べた基準に従って慶応2年以後の漢語辞書を刊行年順に配列し、漢語辞書の出版状況や、漢語辞書の形態の移りゆき、また辞書間の関係を鳥瞰することを目的として作成したものである。
- 2、ここで言う辞書とは、言語上の何らかの特徴を基準にして掲出語を組織・配列した組織配列辞書と、特定の書物の冒頭から順次に難字・難語を抽出して配列した順次掲出辞書のことである。ただし、『日本外史』『国史略』など漢籍読解辞書のように、返読語、句、固有名詞が多数入っているもの、『読本』などの和書読解辞書のように和語の多いものは除いてある。特に順次掲出辞書については認定を厳しくした。
- 3、配列は、原則として奥付の刊行の年月順にしたが、刊行年月のないものは届あるいは免許を採り、奥付のないものは序文や凡例の日付、見返しなどのもっとも後の年月を採った。刊行年月の不明の場合は*で示し、適宜に順序を按配することがある。『未味／字解』漢語都々逸』など。「春」「秋」も、その3か月の間に適宜はめこんだ。同じ月に刊行された辞書は日によらないで書名の五十音に従った。この一覧は、『近代国語辞書の歩み』、『明治期漢語辞書大系』の解説・解説補訂、『国立国会図書館蔵書目録^{明治期}』、山田忠雄責任監修『明治初期辞書集成目録』（ナタ書房 平成元年刊）の恩恵を受け、また拙著『近代漢語辞書の成立と展開』を用いているが、これらに記載の刊行年月と完全に合わせることは困難であるので機械的に奥付を中心に採用した。刊行月の次の「再」は再版のこと、漢数字は、それぞれの版のことである。
- 4、全体の形態が玉篇や節用集であっても、一定量の漢語辞書部があれば、本編で述べたように漢語辞書と認定したが、その場合、「玉篇型」「節用集型」と注記した。また、特殊な形態を融合型とすることがある。
- 5、書名の頭の数字は刊行年順に付した番号である。
- 6、書名は原則として内題を採用した。書名の頭の「 」は角書きである。書名の後は刊年・編者名・組織・配列・丁数（ページ数）・語数・備考の順である。
- 7、配列は第1次の配列基準だけを掲げ、第2次以下は省略した。
- 8、組織は「／」の左が行数、右が段数である（2字漢語の場合を数えてある）。「不」は「不分段」の略である。
- 9、丁数（ページ数）は飛び丁・飛びページなどは加除していない。附録部分を除いた辞書本体の記載最終ページを記した。開始は1丁からとは限らない。特に頭書の場合はこのことに注意を要する。ただし、語数を計算するときには実丁に改めた。
- 10、掲出語数は概数に近い。特に頭書辞書の語数は多くの場合、行数・段数・ページ数を掛けた推定値であるので〔 〕で括った。玉篇型・節用集型については原則として語数を数えず、そのことを「 」で示した。独立の漢語辞書の掲出語であっても未確認の場合は「 」で示した。早引型の漢語辞書では振り仮名の1字から3字までの、造語成分の単字が含まれている。改題本などの語数は初版のものを（ ）のなかに入れて示した。なお、「名乗」「地名」「熟字・熟語」などに分類されている場合は「熟字・熟語」のみを数えた。
- 11、山田忠雄氏が『近代国語辞書の歩み』で漢語辞書に与えられた番号は「歩み……」とし（「歩み玉……」は玉篇の番号であり、「歩み節……」は節用集の番号である。また時には「近代国語辞書の歩み」や『近代漢語辞書の成立と展開』の関連ページを記すことがある）、「大系」で使っている番号は「大系……」とした。また国立国会図書館に所蔵されている辞書には「国会○」として○を付けた。今後の研究の発展のために公的機関の所蔵を示しておくことが有益であると考えたからである。
- 12、備考における大系の括弧中の数字は、その辞書の解題、ないし解題補訂に関連記事が出ていることを示す。

書名	刊年	著者	組織	配列	丁数	語数	備考
001 [砲／術] 訳名字類	慶応2年10月	中柴中	6/1	出現順	12丁	140語	歩み0、大系123、 『歩み下』96ページ、『展開』49ページ。
002 [砲／術] 訳語字類	慶応3年*月	不明	6/1	出現順	12丁	140語	歩み0、大系123、 『歩み下』96ページ、『展開』49ページ。
003 訳書字類	慶応3年6月	大月清可	8/4	面数	57丁	3520語	歩み0、大系124、
004 内外新報字類	慶応4年5月?	不明	10/2	出現順	5丁	170語	歩み0、大系1、
005 新令字解	慶応4年6月	荻田嘯	12/2	イロハ	24丁	904語	歩み1a、大系2、
006 [日誌／必用] 御布令字引	明治1年11月	四方茂萃	6/3	部首	47丁	1076語	歩み3、大系3、
007 布令字弁 ¹⁾	明治1年11月	知足	12/2	イロハ	24丁	778語	歩み2、大系4、
008 内外新聞画引	明治1年11月?	不倦斎	10/2	面数	30丁	1083語	歩み4、大系5、
009 新令字解	明治1年12月	荻田嘯	12/2	イロハ	24丁	904語	歩み1d、大系(2)、
010 [民家手引] 布令字引	明治1年*月	知足	12/2	イロハ	24丁	— 語	歩み0、大系(4)、
011 漢語字類	明治2年1月	庄原謙吉	7/3	部首	143丁	4340語	歩み5、大系6、
012 令典熟語解	明治2年2月	伊藤正就	12/2	特殊	26丁	984語	歩み6a、大系7、
013 [布令／必用] 新撰字引	明治2年4月	松田成巳	12/2	部首	85丁	3260語	歩み7、大系8、
014 日誌字解	明治2年5月序	岩崎茂実	12/2	画数	61丁	1966語	歩み8、大系9、
015 令典熟語解	明治2年6月	伊藤正就	12/2	特殊	26丁	984語	歩み6b、大系(7)、
016 布令字弁 ¹⁾	明治2年7月	知足	12/2	イロハ	25丁	779語	歩み0、大系4、

7の改訂版。

017	布令字弁 ² 編	明治3年2月	知足	12/2	イロハ	25丁	965語	歩み13、大系4、国会
018	[未味/字解] 漢語都々逸 ¹ 編	明治3年春	山々亭有人	不整	特殊	25丁	78語	歩み0、大系11、国会 語数は両側に振り仮名を持つ漢語数。以下同じ。
019	[未味/字解] 漢語都々逸 ² 編	明治*年*月	弄月閑人	不整	特殊	25丁	69語	山田0、大系11、国会
020	[未味/字解] 漢語都々逸 ³ 編	明治*年*月	弄月亭主人	不整	特殊	25丁	71語	歩み0、大系11、国会
021	[未味/字解] 漢語都々逸 ⁴ 編	明治*年*月	弄月亭主人	不整	特殊	25丁	89語	歩み0、大系11、国会
022	[未味/字解] 漢語都々逸 ⁵ 編	明治*年*月	弄月舎閑人	不整	特殊	25丁	85語	歩み0、大系126、国会
023	[未味/字解] 漢語都々逸 ² 編	明治*年*月	不明	不整	特殊	18丁	54語	歩み0、大系125、国会
024	[新作流行] 漢語都々逸 ¹ 編	明治3年3月	一荷堂主人	不整	特殊	16丁	104語	歩み0、大系0、国会 『新令字解』と同形の横長袖珍本。 ^{注1}
025	[童蒙/必読] 漢語図解 ¹ 編	明治3年夏	弄月亭主人	不整	特殊	20丁	278語	歩み0、大系15、国会 『歩み』337-339へ。 ^{注2}
026	[童蒙/必読] 漢語図解 ² 編	明治3年*月	弄月亭主人	不整	特殊	20丁	279語	歩み0、大系15、国会
027	[童蒙/必読] 漢語図解 ³ 編	明治3年*月	弄月亭閑人	不整	特殊	19丁	287語	歩み0、大系15、国会 『歩み』337-339へ。
028	新撰字類	明治3年7月	松屋貫一	7/3	イロハ	124丁	5040語	歩み17、大系12、国会
029	[掌中] 早字引[集一名御一新字引]	明治3年9月免	不明	14/不	イロハ	82丁	—語	節用集型 歩み節0、大系134、国会○ 内題の角書きの上に「布令/日誌/必用」とある。
030	増補新令字解	明治3年秋	萩田嘯	12/2	画数	39丁	1700語	歩み9、大系10、国会○
031	漢語便覧	明治3年10月序	梅岳散人	10/2	イロハ	118丁	4315語	歩み18、大系13、国会○ 国会図書館本は「大全漢語便覧」
032	増補新令字解	明治3年*月	荻田・東条	12/2	イロハ	126丁	5453語	歩み19、大系14、国会 同じ奥付を持つ数種類の改編本がある。

033 布令字弁 ³ 編	明治4年2月	知足	12/2	イロハ	25丁	923語	歩み0、大系4、国会
034 [掌中] 早字引[集一名脚一新字引]	明治4年春	不明	14/不	イロハ	82丁	—語	歩み節51、大系(134)、国会
035 [日誌/画引] 新令字類	明治4年春	長谷川寒一	12/不	部首	181丁	—語	玉篇系 歩み玉205、大系0、国会
036 漢語便覽	明治4年5年	横山監	12/2	意味	48丁	1854語	歩み21、大系16、国会
037 大全漢語解	明治4年5月刻	岩井久真	11/2	部首	202丁	6775語	歩み22、大系17、国会
038 布令字弁 ⁴ 編	明治4年6月	知足	12/2	イロハ	23丁	797語	歩み0、大系4、国会
039 布令字弁 ⁵ 編	明治4年8月	知足	12/2	イロハ	24丁	833語	歩み0、大系4、国会
040 布令字弁 ¹ 編- ⁵ 編	明治4年8月	知足	12/2	イロハ	122丁	4297語	24・25・25・23・24丁 歩み25、大系(4)、国会
041 和訓漢語弁	明治4年*月	不明	6/6	不順	3丁	168語	歩み0、大系127、国会
042 布令字弁 ⁶ 編	明治5年2月	知足	12/2	イロハ	22丁	844語	歩み0、大系4、国会
043 布令字弁 ⁷ 編	明治5年8月	知足	12/2	イロハ	26丁	1023語	歩み0、大系4、国会○
044 布令字弁 ¹ 編- ⁷ 編	明治5年8月	知足	12/2	イロハ	170丁	6164語	24・25・25・23・24・22・26丁 歩み0、大系(4)、国会
045 新撰字解	明治5年秋	中村守男	12/2	イロハ	128丁	5534語	歩み26a、大系18、国会○
046 [布令/必携] 新聞字引	明治5年秋	慶雲堂	12/2	部首	85丁	3264語	歩み27a、大系128、国会○ 13『[布令/必携]新撰字引』の改編、改題本。
047 増補布令字弁	明治5年冬再	知足	12/2	イロハ	159丁	6612語	歩み29b、大系19、国会
048 漢語統紹	明治6年3月序	梅岳隠士	9/2	イロハ	114丁	3470語	歩み32、大系20、国会○
049 世界節用無尽蔵	明治6年4月免	横尾謙七	6/6	イロハ	91丁	5661語	歩み33、大系21、国会○
050 漢語二重引	明治6年7月見	萩原乙彦補	12/2	イロハ	100丁	4454語	歩み36、大系22、国会○
051 漢語類苑大成	明治6年7月見	大理学人	8/2	イロハ	133丁	4031語	歩み35、大系23、国会○

題簽に「荻田長三」

052漢語字解	明治7年1月	池田観	12/2	イロハ	119丁	4356語	歩み0、大系25、国会○
053 [布令/必携] 大増補新撰字引	明治7年1月	宇喜多練要	12/2	部首	147丁	5754語	歩み41、大系24、国会
054律令字類	明治7年5月凡	猪野好爵	11/不	イロハ	77丁	3294語	歩み45、大系26、国会○
055外史訳語	明治7年8月	大森・庄原	8/不	画数	213丁	8526語	歩み325a、大系129、国会○
056漢語註解	明治7年8月	津江左太郎	14/2	部首	117丁	7248語	歩み49、大系27、国会
057 [広/益] 熟字典 <small>画引部</small>	明治7年8月	湯浅忠良	12/2	部首	242丁	11054語	歩み50a、大系28、国会○
058新撰字解	明治7年8月	岩崎茂実	12/2	イロハ	229丁	10284語	歩み52a、大系29、国会○
059漢語字解	明治7年9月	長橋間右衛門	8/1	イロハ	97丁	1501語	歩み0、大系0、国会○ 『四季文章』の頭書。 ^{注3}
060新撰字解	明治7年秋	中村守男	12/2	イロハ	128丁	5534語	歩み26b、大系(18)、国会
061 [増補/改正] 新撰字類	明治7年10年刻	橋爪貫一	7/3	イロハ	162丁	6666語	歩み57、大系33、国会○
062大増補漢語解大全	明治7年12月	岩井真二郎	11/2	部首	473丁	17635語	歩み54、大系30、国会○
063 [漢語/新撰] 訳書字解	明治8年1月	小川伊典	12/2	画数	136丁	6096語	歩み55、大系31、国会○
064 [音画/画引] 大空漢語字彙	明治8年2月序	青木輔清	7/4	イロハ	200丁	9159語	歩み56a、大系32、国会○
065 [布令/必携] 新聞字引	明治8年春序	慶雲堂	12/2	部首	84丁	(3264語)	歩み27b、大系(128)、国会 46 『[布令/必携]新聞字引』の改編本。
066音訓新聞字引 <small>一号</small>	明治8年4月免	萩原乙彦	12/2	部首	124丁	5352語	歩み58b、大系44、国会○
067雑語之解	明治8年4月	大角豊次郎	10/2	イロハ	68丁	[2620語]	歩み0、大系0、国会○ 『[頭書/布告/字解]開化消息往来』の頭書。
068 [布令/字解] 漢語文章早引	明治8年5月許	西野古海	11/1	イロハ	136丁	2928語	歩み0、大系34、国会○

069 [掌中／類聚] 漢語集	明治8年6月	桜春雄	6／2	イロハ	126丁	2888語	歩み60、大系35、 51『漢語類苑大成』の改題本。	国会
070開化字引大全	明治8年7月刻	巻菱潭	12／2	イロハ	144丁 (100-243)	6286語	歩み62、大系37、 「日用漢語類」のみの丁数・語数	国会○
071輿地誌略熟字解	明治8年7月	説田孫三郎	9／2	部首	65丁	1170語	歩み351、大系0、	国会
072開化新選字引	明治8年10月	西野古海	12／3	五十音	144丁	9769語	歩み0、大系38、	国会○
073御布告いろは節用	明治8年10月	鶴田真容	6／5	イロハ	14丁	840語	歩み0、大系36、	国会○
074輿地誌略字解	明治8年10月	西野古海	7／不	画数	70丁	5149語	玉篇型 歩み玉706、大系130、	国会○
075 [布令／日誌／新聞／必用] 開化いろは字引	明治8年11月	山本小三郎	10／5	イロハ	69丁	7183語	歩み0、大系39、	国会
076外史字引	明治8年11月免	斎藤実頼	9／6	画数	120丁	8959語	玉篇型 歩み0、大系0、	国会○
077 [漢語] 開化節用字集	明治8年12月	宇喜多小十郎	5／5	イロハ	138丁	6394語	歩み65、大系41、 45『新撰字解』の改題本。	国会○
078 [広益] 熟字典 <small>画引部</small>	明治8年12月改	湯浅忠良	12／2	部首	242丁	(11054語)	歩み50b、大系(28)、	国会
079 [広益] 熟字典 <small>版名引</small>	明治8年12月	湯浅忠良	12／2	イロハ	232丁	10967語	歩み51、大系40、	国会○
080 [布令新聞／新撰校正] 普通漢語字引大全	明治8年12月	平田繁	18／2	部首	173丁	11054語	歩み66、大系42、 57『[広益]熟字典 <small>画引部</small> 』の改題本。	国会○
081漢語新字引	明治9年1月	林三益	12／2	五十音	191丁	8649語	歩み67、大系43、	国会○
082新撰字解	明治9年1月	中村守男	12／2	イロハ	128丁	5534語	歩み26c、大系18、 奥付に「著述河部彦亮」。	国会
083 [音画／画引] 大全漢語字彙	明治9年1月見	青木輔清	7／4	イロハ	202丁	9153語	歩み0、大系32、 見返しに「増訂補刻」とある。	国会
084漢語和解一覽	明治9年2月	藤野貞造	不整	番付	1枚	167語	歩み0、大系46、	国会

085 [訓訳/字義] 御布令字引	明治9年2月	中川藤四郎	12/2	部首	319丁	13733語	歩み462べ、大系0、 【平仄/附韻】字林改正玉篇』の頭書。	国会○
086 国史略記語	明治9年2月	西野古海	8/不	画数	94丁	— 語	玉篇型 歩み330、大系0、 『歩み』では後に玉639fに改める。	国会○
087 首書略解	明治9年2月	松岡大愿	14/不	画数	131丁	— 語	歩み0、大系0、 『袖珍史字引大成』の頭書。	国会○
088 [新/撰] 漢語字林大成	明治9年2月	橋爪貫一	10/4	画数	149丁	11780語	歩み68、大系45、	国会
089 増補布令字弁	明治9年2月免	知足	12/2	イロハ	159丁	6612語	歩み29c、大系(19)、	国会
090 歴史字引	明治9年2月免	東条保	11/不	画数	90丁	5271語	歩み335、大系131、 丁数・漢語数は上巻中巻の熟字部のみ。	国会
091 漢語二重引	明治9年3月再	萩原乙彦補	12/2	イロハ	110丁	4818語	歩み0、大系(22)、	国会○
092 漢語和解後編	明治9年3月	不明	不整	番付	1枚	184語	歩み0、大系47、	国会
093 小学読物熟字解	明治9年3月	竹内泰信	12/1	画数	100丁	2297語	歩み0、大系48、	国会○
094 増補布令字弁	明治9年3月	知足	12/2	イロハ	159丁	(6612語)	歩み29c'、大系(19)	国会
095 輿地誌略熟字解	明治9年3月	説田孫三郎	9/2	部首	65丁	(1170語)	歩み0、大系0、	国会○
096 [音画/両引] 開化節用集	明治9年4月	福寿信	10/3	イロハ	277丁	15162語	歩み71、大系49、	国会○
097 [初学/必携] 大全漢語字書	明治9年4月免	土居清喜	8/5	イロハ	197丁	14877語	歩み70、大系62、	国会○
098 増補漢語字解大全	明治9年4月	長橋間右衛門	12/2	イロハ	187丁	8240語	歩み0、大系0、	国会○
099 [音画/両引] 大全漢語字彙	明治9年4月	青木輔清	7/4	イロハ	202丁	9159語	歩み56b、大系0、	国会
100 音訓新聞字引 ^一 号	明治9年5月求	萩原乙彦	12/2	部首	124丁	5352語	『歩み』合本1、 歩み58c、大系(44)、	国会
101 [圖引] 新撰漢語字引大全	明治9年5月	近藤元粹	12/2	部首	329丁	14764語	歩み74、大系53、	国会

102 [皇朝史略/国史略/日本外史] 三史字類	明治9年5月	増田長裕	5/不	画数	192丁	一語	歩み336、大系0、国会
103布告律令字引	明治9年5月	山本義俊	10/7	イロハ	34折	7376語	歩み72、大系51、国会
104増補漢語字解大全	明治9年6月	長橋間右衛門	12/2	イロハ	187丁	8240語	歩み77、大系55、国会○
105 [校正/増補] 漢語字類	明治9年6月	莊原和	8/3	画数	212丁	9795語	歩み76、大系54、国会○ 書名は外題による。内題は「莊原和漢語字類」。
106漢語一覽表 ² 版	明治9年7月	関岡半六	不整	漢字数	1枚	194語	歩み0、大系56、国会○
107 [布告/必用] 漢語絵字引	明治9年7月	池田東園	8/2	イロハ	51丁	1372語	歩み75、大系57、国会 同じ刊年の改編本がある。 ^{注4}
108大全漢語便解	明治9年7月免	浜真砂	12/2	部首	242丁	11034語	歩み0、の改編本。 57 [「広益」熟語解画引版]
109漢語字引	明治9年8月	安倍為任	10/2	イロハ	15丁	492語	歩み0、大系0、国会○ 『漢語字引/事物異名』開化消息往来の頭書。頭書の尾題は「漢語字解」。
110漢和作文字類	明治9年8月	村田徽典	8/3	イロハ	88丁	3861語	歩み0、大系0、国会○
111雅俗節用	明治9年8月	村田徽典	8/3	イロハ	88丁	3861語	歩み0、大系58、国会 110『漢和作文字類』の改題本。
112布告字類図解	明治9年8月	安倍為任	3/4	イロハ	30丁	700語	歩み0、大系59、国会○
113読書自在	明治9年9月	橋爪貫一	8/4	イロハ	216丁	12852語	歩み78、大系60、国会○
114 [講釈/附] いろは布告字引	明治9年10月	岡三慶	5/5	イロハ	20丁	950語	歩み0、大系61、国会○
115新撰字解	明治9年10月再	岩崎茂実	12/2	イロハ	229丁	(10286語)	歩み52b、大系(29)、国会
116日本政記訳語	明治9年10月	新井隆存	8/不	画数	95丁	一語	歩み0、大系0、国会○ 玉篇型、漢語辞書との境界線上にある辞書。標出字に音訓なし。人名・地名あり。
117 [新選] 漢語小字典	明治9年12月免	高橋易直	8/不	イロハ	146丁	12746語	歩み0、大系68、国会○

118 [画引/いろは引] 新撰両通字引	明治9年12月刻	浮田小十郎	7/不	イロハ	234丁	一語	節用集型 言語門は31「漢語便覧」を継承したもの。	歩み573、大系0、	国会○
119 [名乗/相性附] 日本外史国史略字類	明治9年*月	安井敏之助	11/不	画数	199丁	13284語	玉篇型、 「歩み」では後に玉645。	歩み337、大系132、	国会○
120 [大増補/銅鑄] 掌中真草字引大成	明治10年1月刻	橋本澄月	13/6	部首	109丁	一語	玉篇型	歩み玉223B、大系0、	国会○
121 [平仮/名附] 部分通用漢語早見	明治10年1月	村井清	54/26	意味	16折	1395語		歩み0、大系63、	国会○
122御布告いろは節用後編	明治10年2月免	鶴田真容	6/5	イロハ	16丁	940語		歩み0、大系64、	国会○
123傍訓註解御布告字引初編	明治10年2月	渡辺助信	10/不	出現順	5丁	228語		歩み0、大系65、	国会○
124漢語両引 便覧画引之部	明治10年3月	藤田善平	15/2	部首	112丁	6081語		歩み81、大系67、	国会○
125漢語両引 便覧画引之部	明治10年3月	藤田善平	15/2	五十音	112丁	6296語		歩み81、大系67、	国会○
126改正漢語便覧	明治10年3月届	石川敬義	9/2	イロハ	114丁	3470語	48「漢語続紹」 の改題本。	歩み81、大系71、	国会○
127漢語和解一覧	明治10年3月	不明	35/4	一覧表	1枚	167語	84「漢語和解一覧」 の改編本。	歩み0、大系66、	国会
128作文字類	明治10年4月	安倍為任	10/2	イロハ	15丁	492語	「開化消息往来」(39丁)の頭書。頭書の尾題は「漢語字解」。 109の改題本	歩み0、大系0、 国会○	国会○
129外史訳語	明治10年4月再	大森・庄原	8/不	画数	213丁	(8526語)		歩み325b、大系(129)、	国会○
130 [改正/増字] 画引 漢語字典	明治10年4月	広沢信房	8/5	部首	187丁	13037語		歩み83、大系70、	国会
131 [訓注] 日本政記字引	明治10年4月	鳥次三郎	8/不	画数	63丁	一語	玉篇型 標出字なし。単字は若干で、大部分が2字漢語。	歩み0、大系0、 国会○	国会○
132 [新聞征討] 戦争字引	明治10年5月	高崎脩助	10/不	イロハ	55丁	3054語		歩み84、大系69、	国会○
133日本外史政記訳語	明治10年5月	新井隆存	8/不	画数	230ペ	一語		歩み0、大系0 標出字に音訓なし。人名・地名や、句もあるが、漢語が多い。	国会○

134 [増/補] 漢語字解	明治10年 6月	長橋間右衛門	10/2	イロハ	68丁	3340語	歩み0、大系0、 増補『四季文章』の頭書。59の増補本。	国会○
135 [画入漢語/第一等] 新聞字引 <small>初編</small>	明治10年 8月	前田喜次郎	10/3	不順	8丁(10丁)	565語	歩み340べ、大系(81)、	国会○
136 外史熟語早引	明治10年10月	舟橋直太郎	12/2	部首	59丁	[2832語]	歩み0、大系0、	国会○
137 漢語日用弁	明治10月10月	宮本興晃	13/3	イロハ	24丁	1734語	歩み0、大系72、 25丁から44丁までは書類の見本。	国会○
138 [布告/新聞] 要語字引	明治10年10月	松本平吉	8/不	イロハ	40丁	— 語	歩み0、大系0、 節用集型 言語門の一部分が漢語辞書。	国会○
139 [御布令新聞/漢語必用] 文明いろは字引	明治10年11月	片岡義助	10/5	イロハ	125丁	11740語	歩み86、大系73、	国会○
140 掌中漢語字林	明治10年12月	伴源平	6/7	イロハ	27折	2210語	歩み0、大系74、	国会○
141 漢語字類	明治11年 1月	松野永太郎	8/2	イロハ	70丁	1595語	歩み0、大系0、 『普通小学用文』の頭書。	国会○
142 [音画/画引] 漢文字引	明治11年 2月	福寿信	10/3	イロハ	277丁	(15162語)	歩み89、大系(49)、 96『[音画/画引]開化節用集』の改題本。	国会○
143 [頭字/画引] 熟字之部	明治11年 3月	小川棟宇	12/不	画数	140丁	— 語	歩み0、大系0、 『鼈頭熟字]普通玉篇』の頭書。	国会○
144 [音画/画引] 大全漢語字彙	明治11年 3月	青木輔清	7/4	イロハ	202丁	(9159語)	歩み56c、大系32、 『歩み』合本2a『五書合本』。	国会
145 開化掌中早引	明治11年 4月	星唯清	8/3	イロハ	88丁	3867語	歩み91、大系75、 111『雅俗節用』の改題本。	国会○
146 [開/化] 漢語字類	明治11年 4月	鶴田真容	8/1	不順	10丁	158語	歩み0、大系0、 『用文熟字講釈』の頭書。	国会○
147 日本外史字典	明治11年 4月	鹿子木静枝	8/不	画数	181丁	— 語	玉篇型、歩み0、大系0、	国会○
148 漢語節用	明治11年 5月	本田利喜	10/2	イロハ	15丁	510語	歩み0、大系0、 『[新撰]開化用文』の頭書。	国会○
149 [画引/早引] 自由熟字在 <small>画引之部</small>	明治11年 5月	大館正材	9/3	部首	128丁	5379語	歩み92、大系76、	国会○

150 [画引／早引] 自由熟字在早引之部	明治11年5月	大館正材	9／3	五十音	128丁	5913語	歩み92、	大系76、	国会○
151 [熟字／音訓] 小学字典	明治11年5月届	大館正材	14／不	画数	66丁	10664語	玉篇型 歩み400、	大系77、	国会○
152 [いろ／は分] 布告新聞字引	明治11年6月届	安倍為任	6／5	イロハ	31丁	1717語	歩み0、	大系79、	国会○
153 [掌中画引／布令必用] 普通漢語解	明治11年6月	大館正材	7／4	五十音	300丁	7248語	歩み0、	大系78、	国会○
154外史訳名	明治11年10月	橋爪貫一	8／不	画数	121ペ	— 語	歩み326、	大系0、	国会
155雅俗漢語訳解	明治11年10月	市川清流	8／不	イロハ	210丁	9636語	歩み0、	大系133、	国会○
156漢語部	明治11年11月	石川詮橋	14／2	イロハ	158丁	8840語	歩み0、 『掌中画引大全』(単字字典)の頭書。	大系0、	国会○
157 [訓訳考訂／意画画引] 明治伊呂波節用大全	明治11年11月	大月囃四郎	13／不	イロハ	228丁	24931語	融合型 『歩み』書名索引には節567とある。	大系80、	国会○
158外史訳語	明治11年12月三	大森・庄原	8／不	画数	213丁	8526語	歩み325c、	大系129、	国会
159漢語日用弁	明治11年*月	加藤富三郎	10／3	不整	10丁	130語	歩み340ペ、	大系81、	国会
160新撰漢語字引	明治12年1月	森琴石	20／3	イロハ	54丁	6326語	歩み0、	大系82、	国会○
161新撰漢語字引	明治12年1月	森琴石	20／3	イロハ	54丁	(6326語)	歩み99a、 『歩み』合本3『懐中便利五書合本』の内。	大系0、	国会
162 [いろ／は分] 布告新聞字引	明治12年2月届	安倍為任	6／5	イロハ	31丁	1717語	歩み0、	大系(79)、	国会○
163必携熟字集	明治12年5月	村上快誠	8／4	部首	428丁	19877語	歩み105a、	大系86、	国会○
164漢語訓解	明治12年5月	松下久吉	8／2	イロハ	208丁	[6656語]	歩み0、 『漢語／訓解』整頭神珍玉篇乾之部』の頭書。	大系0、	国会○
165 [いろ／は韻] 漢語字引	明治12年6月	鶴田真谷	5／4	イロハ	12丁	511語	歩み0、	大系83、	国会○
166新撰以呂波節用	明治12年6月	武田福蔵	15／2	イロハ	104丁	5683語	歩み0、	大系84、	国会○

167 [漢語伊/呂波分] 大全数字引	明治12年 8月	藤田善平	10/6	イロハ	150丁	17503語	歩み108、大系87、国会○
168新撰伊呂波字引	明治12年 9月	宇喜多小十郎	15/3	イロハ	180丁	15877語	歩み109、大系85、国会○
169漢語伊呂波引	明治12年10月	森田鼎	10/4	イロハ	61丁	[2440語]	歩み0、大系0、 【「画引/伊呂/波引」日用字引】の下段。
170 [漢語] 両点早字引	明治13年 1月免	稲葉永孝	7/3	イロハ	20丁	775語	歩み0、大系0、 上3分の1が漢語辞書部、下が用文章。
171 [開化/新増] 大全早引節用集	明治13年 1月	丹羽駒吉	7/不	イロハ	388丁	—語	節用集型 歩み節601a、大系0、国会○
172新撰開化字引	明治13年 6月	松倉吉平	10/不	イロハ	122丁	—語	歩み0、大系0、国会○ 【「頭書新/撰字引」『通俗開化文章』（外題）の頭書。
173 [いろ/は分] 漢語字引	明治13年 9月	徳山純	15/2	イロハ	49丁	2834語	歩み0、大系88、国会
174書用部分字引	明治13年11月	山本幸吉	7/7	イロハ	5丁 (24丁-28丁)	487語	節用集型 歩み0、大系0、国会○ 言語門が漢語辞書部。
175 [初学/必携] 大全漢語字書	明治13年11月	松浦宏	8/5	イロハ	197丁	(14877語)	歩み0、大系0、国会○ 合本『懷宝三書字引』の内。
176 [布令新聞/新撰校正] 普通漢語字引大全	明治13年12月	平田繁	18/2	部首	162丁	(11054語)	歩み66、大系(42)、国会
177明治節用集	明治14年 2月	松川半山	10/不	イロハ	244丁	—語	節用集型、歩み節617、大系0、国会
178 [漢語/両通] 新選いろは字引大全	明治14年 4月	山川良峰	12/2	イロハ	119丁	4356語	歩み0、大系89、国会○ 52『漢語字解』の改題本。
179 [近時/必携] 熟語便覧	明治14年 5月成	鈴木盛公	8/不	イロハ	14折	990語	歩み0、大系90、国会○
180懐中漢語字引大全	明治14年 7月	大館利一	13/3	イロハ	197丁	10127語	歩み120、大系91、国会○
181 [漢/語] 両点以呂波字引	明治14年 7月届	稲葉永孝	7/3	イロハ	23丁	922語	歩み0、大系0、国会○ 上3分の1が漢語辞書部、下が用文章・諸届類。

182部分諸用早引	明治14年 8月	県政吉	7/不	イロハ	5丁 (23丁-27丁)	363語	節用集型、 言語門が漢語辞書部。	歩み0、 大系0、	国会○
183 [伊呂/波分] 漢語字引	明治14年 9月	川口宗昌	6/5	イロハ	31丁	1717語	152 「[いろ／は分] 布告新聞字引」の改題本。	歩み0、 大系92、	国会○
184漢語早見一覧表	明治14年10月	松尾とふ	63/19	イロハ	1枚	1139語		歩み0、 大系93、	国会○
185漢語字引集	明治14年11月	谷壮太郎	13/3	イロハ	24丁	1734語	137 「漢語日用弁」の改題本。	歩み0、 大系94、	国会○
186漢語字引集	明治14年11月	谷壮太郎	13/3	イロハ	24丁	1734語	合本 「いろは漢語字引集」の内。	歩み0、 大系0、	国会○
187 [広益/雅俗] 明治節用字典	明治15年 2月	小笠原美治	8/不	イロハ	257丁	— 語	節用集型	歩み631、 大系0、	国会○
188 [頭書/画引/類語] 明治いろは字引大全	明治15年 3月	内藤彦一	12/4	イロハ	327丁	15118語		歩み123、 大系95、	国会○
189頭書画引類語大全	明治15年 3月	内藤彦一	15/3	部首	327丁	14255語	「明治いろは字引大全」の頭書。	歩み123、 大系95、	国会○
190漢語訓解	明治15年 4月求	松下久吉	8/2	イロハ	208丁	(6656語)	「漢語訓解」 龍頭袖珍玉篇』の頭書。164の再版。	歩み462〜、 大系0、	国会○
191 [改正増補布令/新聞漢語必用] 文明いろは字引	明治15年 5月	片岡義助	10/5	イロハ	154丁	12957語		歩み0、 大系96、	国会○
192 [朝鮮/事件] 新聞字引	明治15年 8月	佐藤三次郎	10/不	イロハ	55丁	3054語	132 「[新聞征討] 戦争字引」の改題本。	歩み0、 大系97、	国会○
193新撰以呂波節用	明治15年 9月	武田福藏	15/2	イロハ	104丁	5683語	合本 「開化早字引大成」の内。	歩み0、 大系 (84)、	国会○
194 [初学/必携] 大全漢語字書	明治15年12月再	松浦宏	8/5	イロハ	197丁	14877語	山田合本25a 「漢宝三書字引」の内。166の再版。	歩み115、 大系 (62)、	国会
195漢語字集	明治16年 3月	福岡広業	9/2	イロハ	100丁	3487語	「普通/広益」 明良用文』の頭書。	歩み0、 大系0、	国会
196 [初学/必携] 大全漢語字書	明治17年 4月	松浦宏	9/2	イロハ	197丁	14877語		歩み0、 大系0、	国会○

197 [初学／必携] 大全漢語字書	明治17年4月	松浦宏	8 / 5	イロハ	197丁	(14877語)	歩み115、大系(62)、 『歩み』合本25bc『懷宝六書合本』の内。	国会
198 [画引] 新撰漢語字引大全	明治17年5月	近藤元粹	12 / 2	部首	329丁	(14764語)	歩み0、大系0、	国会○
199小説字林一名支那俗語集	明治17年7月	桑野銳 顧柳散人	6 / 不	面数	216丁	6591語	歩み0、大系0、 編者は内題では「顧柳散人」。	国会○
200 [新選／普通] 漢語字引大全	明治17年8月	福井淳	8 / 5	部首	187丁	13037語	歩み0、大系98、 130『改正／増字』画引漢語字典』の改題本。	国会○
201新撰漢語早引大全	明治17年10月	武田福藏	15 / 2	イロハ	104丁	5683語	歩み0、の改題本。合本『開化早字引 大成』内にも	国会○
202漢語字類	明治18年1月	川田剛吉	10 / 2	イロハ	60丁	2287語	歩み0、大系0 『[漢語／字類]開化用文証』の頭書。	国会
203広益漢語字解	明治18年2月	藤田善平	10 / 6	イロハ	150丁	17503語	歩み150、大系(87)、国会 167『[漢語伊／呂波分]大全数字引』の改題本。	国会
204漢語字類	明治18年4月	益永晃雲	9 / 2	イロハ	124丁	2756語	歩み0、大系0、 『新撰／普通』改良用文』の頭書。	国会○
205布告新聞漢語字引	明治18年8月	鈴木貞次郎	10 / 1	イロハ	52丁	[949語]	歩み0、大系0、 『[開明阿点]消息往来#講釈』の頭書。	国会○
206雅俗漢語字引大全	明治18年9月	中田幹母	15 / 4	イロハ	160丁	17859語	歩み157a、大系99、	国会○
207漢語字類	明治19年4月	益永晃雲	9 / 2	イロハ	105丁	3154語	歩み0、大系0、 『[改正／増補]文証大全』の頭書。	国会
208広益漢語字類	明治19年6月	水谷彦九郎	10 / 3	イロハ	127丁	7547語	歩み0、大系0、 『明治文章大全』の頭書。	国会○
209広益漢語字類	明治19年6月	水谷彦九郎	10 / 3	イロハ	127丁	[7567語]	歩み0、大系0、 『明治文章大全』の頭書。	国会○
210雑語之解	明治19年10月	福島信三郎	10 / 2	イロハ	68丁	[2620語]	歩み0、大系0、 『[頭書雑語字解]開化消息往来』の改題本	国会○

211 [改正／増補] 漢語新画引大全	明治20年7月	片岡賢三	12／8	イロハ	97丁	8100語	歩み0、大系101、国会○
212 [明治新撰] いろは漢語字典	明治20年10月	安田与三郎	13／3	イロハ	197丁	10127語	180 『懐中漢語字引大全』の改題本。 歩み0、大系(91)、国会○
213漢語いろは字典	明治20年10月	只木小五郎	10／5	イロハ	175丁	17087語	歩み170、大系100、国会○
214漢語字類	明治20年11月	小谷野敏太郎	8／2	イロハ	34丁	[1088語]	歩み0、大系0、国会○ 『[漢語／字類] 開化用文章』の頭書。
215 [漢／語] 作文自在	明治20年11月	塩見文津	10／2	不整	29丁	1152語	歩み0、大系102、国会○
216御布告いろは節用 <small>後編</small>	明治21年2月	沢久次郎	6／5	イロハ	14丁	830語	歩み0、大系(64)、国会○
217当今御布達字類	明治21年5月	鶴田真容	6／6	不整	10丁	705語	歩み0、大系103、国会○
218大成漢語字類	明治21年8月	吉田鉉橘	10／3	イロハ	139丁	[6910語]	歩み0、大系0、国会○ 『明治普通文章』の頭書。頭書は24丁から。
219新撰字解	明治21年9月求	岩崎茂実	12／2	イロハ	229丁	(10286語)	歩み52c、大系(29)、国会○
220新撰漢語字引	明治21年11月	中島久徴	12／3	五十音	144丁	9769語	歩み0、大系(38)、国会○ 72 『開化新選字引』の改題本。
221作文字類	明治22年3月	浅野琢斎	10／2	イロハ	15丁	(492語)	歩み0、大系0、国会○ 『開化消息往来』の頭書。128と同版
222 [広／益] 漢語伊呂波字引	明治22年12月	堀中徹藏	20／2	イロハ	400〜	15499語	歩み190、大系104、国会○
223 [改正／増補] 漢語新画引大全	明治23年5月五	片岡賢三	12／8	イロハ	97丁	8100語	歩み198、大系(101)、国会○
224いろは数引集	明治23年6月	藤谷暢吾	10／不	イロハ	244丁	—語	節用集型 歩み0、大系0、国会○ 言語門に語釈あり。
225作文字解	明治24年2月	菱田政次郎	10／1	イロハ	69丁	1133語	歩み0、大系0、国会○ 『新撰用文章』の頭書。
226 [頭書] 漢語独学	明治24年6月	教育散士 神田松衛	8／1	イロハ	30丁	433語	歩み0、大系0、国会○ 『[新選／作文] 開化用文』の頭書。

227 [改訂/音訓] 新選漢語字引]	明治24年 6月	棚橋広	8 / 5	イロハ	97丁	(7507語)	歩み205a、大系(110)、国会
228 新選漢語	明治24年 8月	北野善之助	26 / 2	部首	298ペ	9582語	歩み463ペ、大系0、国会○ 『作文/活用] 実益字林玉編大全』の頭書。
229 [開化/新増] 大全早引節用集	明治24年 9月二	丹羽駒吉	7 / 不	イロハ	388丁	— 語	節用集型 歩み節601b、大系0、国会○
230 [いろ/は分] 漢語字類	明治24年10月	雲外居士 間瀬秀三	22 / 2	イロハ	52丁	[1912語]	歩み0、大系0、国会○ 『漢語/字類] 作文独稽古』の頭書。
231 漢語熟字典	明治25年 1月	木戸照陽 鉛之助	10 / 不	イロハ	220丁	11215語	歩み211、大系105、国会○
232 [万民/宝典] 漢語作文字引[大全	明治25年 4月	綾部乙松 梅之家兼	15 / 3	イロハ	— 丁	— 語	歩み0、大系(108)、国会 『有益/活用] 新選独字全書』(外題)の内。
233 新撰漢語字引]	明治25年 4月再	森琴石	20 / 3	イロハ	54丁	(6326語)	歩み99b、大系(82)、国会○ 『歩み』合本9『袖珍/新撰] 五書合本』(外題)の内。
234 [漢字/国語] 字典	明治25年 5月	山口仙松	8 / 7	画数	168ペ	— 語	玉篇型 歩み0、大系0、国会○ 和語も多く国語辞書と呼ぶべきか。
235 鼈頭漢語	明治25年 6月	津田秀林 津田威敏	6 / 1	イロハ	321ペ	1465語	歩み462ペ、大系0、国会○ 『鼈頭/漢語] 実用いろは字典』の頭書。標題は角書きによる。
236 [明治/新撰] 漢語字類大全	明治25年 8月	荒川藤兵衛	12 / 2	イロハ	144丁	(6286語)	歩み0、大系(37)、国会○ 70『開化字引大全』の改題本。丁数・語数は『日用漢語類』のみ。
237 漢語活益字典	明治25年10月	清水常太郎	8 / 6	イロハ	160丁	14657語	歩み215、大系106、国会
238 漢語類聚	明治25年10月再	川田兼治	9 / 2	イロハ	28丁	[912語]	歩み0、大系0、国会○ 『漢語/類聚] 新撰手紙之文』(増補2版)の頭書。 初版は明治23年10月。
239 [熟字以/呂波引] 漢語大字典	明治25年11月	荒川義泰	10 / 5	イロハ	235丁	17087語	歩み216a、大系(100)、国会○ 213『漢語いろは字典』の改題本。『新撰/活用] 五書大字典』にも収録されている。

240 漢語早引	明治26年2月	鈴木音彦	20 / 2	イロハ	206丁	— 語	歩み462ペ、大系0、 『漢語／早引』広益無双玉編』の頭書。	国会○
241 漢語熟字解	明治26年3月	九鬼隆誠	8 / 不	イロハ	312ペ	9123語	歩み219a、大系107、 大系0、 『漢語早引』広益無双玉編』の頭書、合本『帝国字典大全』(明治26年4月)の内。	国会○
242 漢語早引	明治26年4月	甲斐山久三	20 / 2	イロハ	206丁	— 語	歩み0、大系0、 『漢語早引』広益無双玉編』の頭書、合本『帝国字典大全』(明治26年4月)の内。	国会○
243 漢語熟字解	明治26年5月	九鬼隆誠	8 / 不	イロハ	312ペ	(9123語)	歩み0、大系(107)、 『五書字典』(26年5月)の内。	国会○
244 鼈頭漢語	明治26年6月	片岡賢三	24 / 2	イロハ	176ペ	8036語	歩み463ペ、大系0、 『鼈頭／漢語』増補活用いろは早引大全』の頭書。	国会○
245 新選漢語	明治26年6月	北野善之助	22 / 2	イロハ	372ペ	10102語	歩み463ペ、大系0、 『作文／活用』実益いろは字引大全』の頭書。	国会○
246 新選漢語	明治26年7月	北野善之助	26 / 2	部首	298ペ	9582語	歩み463ペ、大系0、 『作文／活用』実益字林玉編大全』の頭書、合本の内、注 ⁴ 。	国会○
247 新選漢語	明治26年7月	北野善之助	22 / 2	部首	372ペ	10102語	歩み463ペ、大系0、 『作文／活用』実益いろは字引大全』の頭書、合本の内。注 ⁵ 。	国会○
248 [万民／宝典] 漢語作文字引大全	明治26年8月	梅乃家薫 綾部乙松	12 / 8	イロハ	97丁	8100語	歩み223、大系108、 211『改正増補』漢語新画引大全』の改題本。	国会○
249 漢語字類	明治26年12月	川田剛吉	10 / 2	イロハ	60丁	2287語	歩み0、大系0、 『漢語／字類』開化用文証』の頭書。	国会○
250 漢語字典大全	明治27年1月	甲斐山久三郎	9 / 6	イロハ	162ペ	8090語	歩み0、大系109、 『[日用／有益]三書字典大全』の内にもあり。	国会○
251 新撰歴史字典	明治27年1月	大田才次郎	10 / 不	画数	467ペ	50791語	玉篇型、 歩み0、大系111、	国会○
252 [日用／書翰] 作文字引大全	明治27年2月	稲生・片山	10 / 不	イロハ	315ペ	— 語	歩み0、大系0、	国会○
253 [熟字以／呂波引] 漢語大字典	明治27年3月	荒川義泰	10 / 5	イロハ	235丁	(17087語)	歩み216b、大系(100)、 213『漢語いろは字典』の改題本。『歩み』合本12『新撰／活用』五書大字典』の内。	国会○

254 [改訂/音訓] 新選漢語字引	明治27年3月再	棚橋広	8/5	イロハ	97丁	(7507語)	歩み205b、大系110、国会○
255 雅俗漢語字引大全	明治27年4月再	中田幹母	15/4	イロハ	160丁	(17859語)	歩み157b、大系(99)、国会
256 熟語	明治27年4月	堀中東州	15/3	イロハ	171ペ	[7551語]	歩み0、大系0、国会○ 『[頭書/熟語] 帝国普通用文』の頭書。
257 [漢語/字類] 作文いろは字引大成	明治27年6月	井上勝五郎	9/不	イロハ	103ペ	6042語	歩み365、大系112、国会○ 47『増補布令字引』の改稿本。
258 漢語字引	明治27年9月	多田省軒 多田喜太郎	9/2	イロハ	81丁	[1362語]	歩み0、大系0、国会○ 『[いろは字引/漢語字解] 作文独学大全』の頭書。
259 [漢語/字解] 作文いろは字引大全	明治28年1月	近藤延之	8/5	イロハ	164ペ	5716語	歩み0、大系113、国会○
260 熟語	明治28年3月	鈴木政雄	13/2	イロハ	75丁	[1854語]	歩み0、大系0、国会○ 『作文独案内』の頭書。
261 [明治/実用] 作文字典	明治28年5月	服部喜太郎 鳳鳴生	10/2	イロハ	440ペ	— 語	歩み0、大系0、国会○
262 漢語以呂波引	明治28年7月	古座谷徳次郎	11/1	イロハ	384ペ	(4175語)	歩み464ペ、大系0、国会 『[籠頭/漢語] 明治無双玉篇』の頭書。
263 明治漢語字典	明治29年2月	岡野英太郎	10/5	イロハ	406ペ	19323語	歩み230、大系114、国会○ 『三書字典』(独立本3冊の挿入り)の内にもあり。
264 書讀用語いろは字引	明治29年4月	盛岡可堂 盛岡男也	13/不	イロハ	15丁	— 語	歩み0、大系0、国会○ 『[習字/応用] 実業作文』の頭書。和語も多く国語辞書と言うべきか。
265 漢語字典大全	明治29年4月	甲斐山久三郎	9/6	イロハ	162丁	8090語	歩み232、大系(109)、国会 『歩み』合本13『三書字典大全』。
266 [雅俗/節用] いろは新字典	明治29年12月	和久光徳	5/不	イロハ	420ペ	— 語	節用集型 歩み0、大系0、国会
267 漢語字引	明治29年12月	益田梧堂	20/1	イロハ	430ペ	7152語	歩み0、大系0、国会 『新体日本早引大全』の頭書。

268 漢語字引	明治30年1月	益田悟堂	20 / 1	イロハ	430ペ	7152語	歩み0、大系0、国会○ 『新体日本早引大全』の頭書、合本『新体日本大字典』の内。
269 鸞頭字引	明治30年3月	松本正造	24 / 2	イロハ	176ペ	8036語	歩み0、大系0、国会 『鸞頭／漢語』明治新玉篇大全』の頭書、『鸞頭／漢語』増補活用いろは早引大全』の頭書の改版。
270 漢語以呂波引	明治30年6月	古座谷徳次郎	11 / 1	イロハ	384ペ	4175語	歩み464ペ、大系0、国会 『鸞頭／漢語』明治無双玉篇』の頭書。合本『[画引／節用] 明治正字典』の内。
271 帝国以呂波節用大全	明治31年9月	山田美妙	9 / 不	イロハ	779ペ	— 語	節用集型 歩み0、大系0、国会○
272 漢語早引	明治31年10月再	鈴木音彦	20 / 2	イロハ	206丁	8065語	歩み462ペ、大系0、国会 『漢語／早引』広益無双玉編』の頭書。
273 [音画／画引] 大全漢語字彙	明治33年1月	青木輔清	7 / 4	イロハ	202丁	(9159語)	歩み56d、大系0、国会 『歩み』合本17『新撰／活用』十書字典』の内。
274 故事熟語字典	明治33年2月	藤堂卓	10 / 不	イロハ	145丁	6861語	歩み0、大系116、国会○
275 熟語	明治33年10月	清原黙斉	12 / 1	イロハ	86丁	812語	歩み0、大系0、国会 『普通国民新用文』の頭書。
276 [小学校／用挿画] 新字典	明治33年10月二	辰巳小次郎	11 / 不	イロハ	206ペ	— 語	玉篇型 歩み401、大系0、国会○
277 [新／編] 熟語字典	明治33年11月	内海以直	8 / 4	イロハ	424ペ	(12630語)	歩み0、大系117、国会○
278 [新／編] 熟語字典	明治34年4月三	内海以直	8 / 4	イロハ	424ペ	12630語	歩み240b、大系(117)、国会○
279 [漢語／故義] 熟語大辞林	明治34年12月	山田美妙	9 / 不	イロハ	1359ペ	40202語	歩み248a、大系119、国会○
280 [雅俗／広益] いろは節用字典	明治35年2月	的場子礼	8 / 不	イロハ	257丁	— 語	節用集型 歩み853、大系0、国会
281 [漢語／故義] 熟語大辞林	明治35年3月再	山田美妙	9 / 不	イロハ	1359ペ	(40202語)	歩み248b、大系0、国会

282 [新/編] 熟語字典	明治35年5月三	内海以直	8/4	イロハ	424ペ	(12630語)	歩み240c、大系(117)、国会
283 [熟字必携] 漢語大字典	明治35年7月	大塚子成	8/4	部首	428丁	(19877語)	歩み103b、大系(86) 国会 103 『必携熟字集』の改題本。
284 漢語熟字解	明治35年11月	九鬼隆誠	8/不	イロハ	312ペ	9123語	歩み219b、大系(107)、国会 『歩み』合本19 『五書字典』の内。
285 [新/定] 漢語字典	明治35年11月六	岡野英太郎	6/4	イロハ	436ペ	10285語	歩み0、大系115、国会
286 新選漢語	明治36年7月	北野善之助	22/2	イロハ	372ペ	— 語	歩み463ペ、大系0、国会 『[作文/活用]実益いろは字引大全』の頭書、『歩み』 合本10の内
287 漢語解	明治36年9月	和田正夫	11/1	イロハ	226ペ	2429語	歩み0、大系0、国会○ 『新編いろは字典』の頭書。
288 [漢語/故諺] 熟語大辞林	明治36年9月六	山田美妙	9/不	イロハ	1359ペ	(40202語)	歩み248c、大系0、国会
289 [新/編] 熟語字典	明治37年1月十	内海以直	8/4	イロハ	424ペ	(12630語)	歩み240d、大系(117)、国会
290 新編漢語辞林 <small>一名熟語六万六千辞典</small>	明治37年2月	山田美妙	9/不	イロハ	1515ペ	49494語	歩み270a、大系(120)、国会○
291 漢語辞彙	明治37年5月	久保得二	11/1	イロハ	851ペ	6146語	歩み0、大系121、国会○
292 漢語辞彙	明治37年10月再	久保得二	11/1	イロハ	851ペ	(6146語)	歩み290b、大系(121)、国会
293 [新/定] 漢語字典	明治38年3月五	岡野英太郎	6/4	イロハ	436ペ	(10285語)	歩み235b、大系(115)、国会 「五」版は「七」版の誤りか。
294 鼈頭漢語	明治38年4月再	片岡賢三	24/2	イロハ	176ペ	— 語	歩み463ペ、大系0、国会 『鼈頭/漢語]増補活用いろは早引大全』の頭書。
295 [読書/作文] 実用辞彙	明治38年5月	久保天随	10/5	五十音	656ペ	— 語	歩み0、大系0、国会○ 和語も多く国語辞書と言うべきか。
296 [万民/宝典] 漢語作文字引大全	明治38年7月再	綾部乙松 梅之家薫	12/8	イロハ	97丁	8100語	歩み0、大系(108)、国会

297新式いろは引節用字典	明治38年8月	大田才次郎	10/不	イロハ	2206ペ	— 語	節用集型、 歩み876a、 大系0、 内題の下では大町桂月・久保天随と共編。	国会
298 [日用/書翰] 作文字引	明治38年10月	内藤加我 北村北溟	10/不	イロハ	105ペ	— 語	歩み0、 大系0、 『日用文と作文字引の頭書。和語も多く国語辞書と言 うべきか。』	国会○
299作文新辞典 <small>漢語編</small>	明治39年1月	中村巷	22/2	五十音	318ペ	10189語	歩み0、 大系122、	国会○
300 [漢語/故語] 熟語大辞林	明治39年8月九	山田美妙	9/不	イロハ	1359ペ	(40202語)	歩み248d、 大系0、 奥付に「増補」とあり。	国会
301小説字林—名支那俗語集	明治39年8月	桑野銳 願柳散人	6/不	画数	216丁	(6591語)	歩み0、 大系0、 199の再版本。	国会○
302 [いろ/は引] 漢語新字典	明治39年10月	錦耕堂	14/4	イロハ	90ペ	4255語	歩み0、 大系118、	国会○
303漢語解	明治40年3月	清水善博	10/1	イロハ	330ペ	3251語	歩み0、 大系0、 『袖珍無双いろは字典』の頭書。	国会
304新編漢語辞林 —名熟語六万六千辞典	明治40年4月三	山田美妙	9/不	イロハ	1515ペ	49494語	歩み270b、 大系120、	国会
305龍頭漢語	明治41年3月再	片岡賢三	24/2	イロハ	176ペ	[8036語]	歩み0、 大系0、 『龍頭/漢語』増補活用いろは早引大全』の頭書。 奥付は松本正道編集。	国会
306新式いろは引節用辞典	明治41年10月七	大田才次郎	10/不	イロハ	2206ペ	— 語	歩み876c、 大系0、	国会
307 [新/編] 熟語字典	明治41年3月	内海以直	8/4	イロハ	424ペ	12630語	歩み0、 大系(117)、	国会
308漢語熟字解	明治42年1月八	九鬼隆誠	8/不	イロハ	312ペ	9123語	歩み219c、 大系(107)、	国会
309漢語以呂波引	明治43年3月十二	古座谷徳次郎	11/1	イロハ	384ペ	— 語	歩み464ペ、 大系0、 『龍頭/漢語』明治無双玉篇』の頭書。	国会
310新式いろは引節用辞典九	明治43年6月	大田才次郎	10/不	イロハ	2206ペ	— 語	歩み0、 大系0、 内題の下では大町桂月・久保天随・大田が共編。	国会○

注1 浅野敏彦『新作流行漢語都々逸加編』の複製・翻刻・漢語索引、「大阪成蹊女子短期大学研究紀要34」、平成9年3月)。
注2 浅野敏彦『漢語図解—索引と複製—』(平成2年7月刊、私家版)。

- 注3 土屋信一「漢語流行の一側面——明治初期女子往来物を資料として——」（『国語語彙史の研究5』、昭和59年5月刊）。
- 注4 浅野敏彦「『布告必用漢語画字引』の漢語」（『文学・語学』114号、昭和62年6月）。
- 注5 合本「〔鼈頭／漢語〕 真草大字典」（外題）の内。
- 注6 合本「〔鼈頭／漢語〕 真草大字典」（外題）の内。

【補記】 下記の辞書は上のリストに加えなかった。

編纂 いろは辞典（高橋五郎編、明治21年12月から同22年2月刊）
編纂 言海（大概文彦編、明治22年3月から同24年4月刊）
日本大辞書（山田美妙編、明治25年7月から同26年12月刊）

本編・附表ともに山田忠雄氏の『近代国語辞書の歩み』に負うところが大きい。特に附表の合本についての情報はすべてこの書に依っていると行って過言ではない。記してお礼を申し上げる。